

忘れ残りの記「四半自叙伝 前編」(吉川英治)

五石十人扶持

おもいがけない未知の人から、ぼくらは常々たくさん手紙をうける。作家とか何とか虚名をもった種類の人々はたぶんみなそうではないかとおもう。つい先頃もその中の一通に中野敬次郎とした封書があった。小田原市教育委員会事務局の封筒である。読者かナ、とおもいながら披いた。想像はちがっていた。次のような用向きだった。

あるいはもうお忘れかもしれませんが、戦前、市長の益田信世氏の発唱で、当地の公民館で「吉川英治氏を郷土に迎える会」を開催したことがあります。小生も小田原図書館長、郷土史研究会の一員として、そのせつ演壇から御挨拶をかねて「吉川氏の先代について」といったような話をいたしました。甚だ古い事でそれだけの御縁でしかありませんが、じつは、来る十一月三日の文化の日に、おなじ会館において恒例の文化祭を催します。当地出身の文化人の方々にも何かとお世話になっておりますが、こんどはひとつ、もいちど郷土の人々へ何か御講演ねがえないでしょうか。御都合よろしくば重ねて詳細お打合せ申しますが、まずは……。

右は文意で中野氏の原文ではない。この稿の書出しにあたって、手紙管を掻き探してみたのだが、見つからないので、記憶に依ったわけである。ぼくは元来、信書は一切保存しない習慣だし、日記などもつけたことがない。旅行先へも手帳や写真機などは持って出たことがなく、どうかして気紛れに持って出ても、使って帰ったためしはない。

自分が不精者なので、ひとの克明な記憶には、一も二もなく感心する。徳川夢声氏の随想などには、事々に何年何月とはつきり出てくる。おそらく日記の功德であろう。他日、予期しない資料ともなつて、後世を益するかもしれない。

頼山陽の母梅颯女史の日記などは、山陽がお腹にやどる前から山陽の死後十数年にまで及んでいる。世界に例のない「母の日記」といえる。現在の中では永井荷風氏の「断腸亭日乗」など文明批評や風俗史料としても多大な文化価値をふくんでいる。かりにもし荷風氏の作品と日記とを二分していずれを採るかといえ、ぼくはためらいなく日記を採る。

日記をつける風習はずいぶん古くからあったのであろう。ぼくの書いた新平家物語の参考書などにしても、肝腎かなめの所は、おおむね当時の公卿日記を参照とした。表面の史料よりも真に近い機微がうかがわれ、人間そのものにもじかに触れうるからである。

ところが往々その公卿日記にもどっちを取っていいかわからない各人各様な記述に遭遇したりする。一つ事件も見方により当人の実感には相違をもってしまうものか。媒体が人間だからこれは避け難いことというほかはあるまい。また他人には示さぬものでも、つい偽飾や欺瞞の自意識にも片寄るの

ではあるまいか。

日記は新年からがいい。来年から始めてみよう、と、ぼくも折には年暮の書店で新しい日記帳を買ってみたりする。けれど、不精や健忘よりも、何か正直が書けない気がしてすぐ厭になってしまふ。都合のわるい所は××だの△△にしておいても、自瞞の不快さは蔽いえない。結局、書かないのもごまかしだが、その方が気がらくなので止めてしまひ、晩生いよいよあいまい模糊と自分で自分をばかして生きているようなものである。

そのぼくに難題がふりかかった。半自叙伝風なものを書けという。とんでもない事とおもつた。そのくせ、ひとの自叙伝的なものはおもしろく読む。長谷川如是閑氏の「心の自叙伝」。立派である。優れた自画像であり時代像だ。菊池寛氏の「半自叙伝」。あのような自己の割りきりかたも、ぼくのなしうる所でない。長谷川伸氏の「ハンコ伝」。とても、あんなにまでは苦勞人らしい苦勞をしたぼくでもない。だいいち、ぼくの経路などは人に語っておもしろいものではないのだ。語るべからざるものとすら思っている。家族にさえ身の上ばなしめいた話は余りしたことがない。弟妹たちはうすうす知る所もあるが、まだ二十歳前の息子たちも、父については眼の前に見る父のほか何も知るところはないであろう。

ところが稀々、角川書店版の昭和文学全集の「親鸞」の巻末に、ぼくも自分の著者年譜を附けなければならなくなり、初めて自分の六十年を一歳から誌してみた。それは何の学歴もなし順当な生い立ちもないぼくなので、自然一風異なった

年譜になった。口のわるい友人たちは「本文は読まないが巻末の年譜だけはおもしろかった」と云ったりした。しかし、そうかなあ、と思っただけで、かくべつな理由を自分の経歴に振向けてみる気にもならなかった。

半自叙伝を書けと望まれたのはそれ以前からの事である。もちろん謝りつづけてきた。だが、たびかさなると自然両者の間に言質みたいなものが生じたり自己の中にも書く気はないのに描くばかりな構想などをつい持ってしまうものである。あいては文春のSさんだ。牛はくたびれていて坐ってもしみたい程なのに、も一つ荷を乗つけて牧童みたいに棒切れを振る。牛はばかだからつい歩き出すというわけである。業というのか根性というのかわれながらこんなものを書く気になった気がしない。

なぜならば、ぼくは日記すらつけ得ずに来たほど自分で自分に触れられない臆病者で自瞞にみちている男だ。とても自己を裸にして人に示すなどは出来そうもない。のみならず過去を語ることは両親を語ることになり、明治、大正の世代に小さく灯ともしていた両親の家庭とて、当然な事ながら、まったく封建そのものの一軒だった。いわばぼくなどは「封建の遺子」である。今日の子弟に何を語る資格がある者ではない。また一個の文学者としては正直未完成であり、多少、虚名があるにすぎないものと、自分の事は誰より自分がいちばんよく知っている。

それやこれやは、今日までS氏に謝って来た理由であった。しかしそんな愚痴をいちいち聞いていたら文芸春秋の編集長などは出来るものじゃないそうである。「なにも御自分でいや

だと思ふことは書く必要はないでしょう。作家だからそんな義務があるなんてわけのもんじゃないやありませんからね。書けるそこ、書きたいところだけお書きになったらいいいじゃありませんか。半自叙伝でいけなければ、四半自叙伝でもいいですよ、とにかくお待ちしますから」と、つまりはこっちの根負けである。

いったい何を読ませられるのか、読者は見当がつかないであろう。筆者のぼくにも何から書いていいのかはつきり掴めていないのだから。——ただ父の郷地は小田原なので、最近手にした同地の中野敬次郎氏からの書翰を、これ幸いと書出しの手懸りにさせてもらった次第だった。

前述、中野氏の手紙にも見えるように、ぼくは小田原市から招かれた事がある。公民館はいっぱい入りで、ふつうの講演会とちがい何かとても面映ゆかった。開会のへき頭に益田市市長は「吉川さんはどうも怪しからん、小田原は父祖の出身地であるのに、当地にはめったにお顔も見せず文章にも見えないから、市民はそんな関係をいっこう知っていない。そこで私が強引に引っぱり出して、今夕、皆様に御紹介申しあげた次第であります」といったような挨拶をされたと覚えてる。

ところが、拍手のあらしの中からぼくの方を見ておかしがっている顔が幾つもあった。ぼくは小田原に素気ないどころか、その頃、自分でカン詰執筆に出かければ、たいがい塔ノ沢か小田原界隈^{かいわい}であった。福住の主人だの春日の女将だの、あちこちの人とは、のべつお目にかかっていて、益田市長に

は御不沙汰していたものの、そう小田原を忘れていたわけではない。

そこらはまだよかったが、やがて郷土史研究会を代表して、中野敬次郎氏が登壇された。そして高山樗牛^{ちよぎゅう}からの小田原出身の文士をかぞえ、ぼくの事に及んで「じつは、この会に先だって、郷土史家たちの間で、吉川氏のご先祖に就て調べてみたのですが、どうも詳しい事がわかりません。ただ吉川氏の曾祖父、祖父ぐらいまで、お住いであつたらしい土地とか、武鑑ではありませんが、大久保藩の藩士の職禄を書いたものには、お名前が見える程度であります。で、それに依りますと、吉川氏の祖父にあたられる吉川銀左衛門氏は、藩の徒^{かちざむらい}士のひとりで、市内から早川の方へ寄つた下河原にお住いで、一時、根府川^{ねふかわ}関所番を勤められたこともあつたようであります。そして、その禄高はですな」と、ここでちょっと中野氏は声に抑揚をつけ微笑したようにぼくの印象には残っている。「——つまりその記録によりますとですね、吉川銀左衛門氏は、当時、五石^{ごく}十人扶持^{ふち}をいただいておつたという事であります……」まで来ると、聴衆がどっと爆笑してしまった。中野氏は壇上で絶句し、会館は笑いやまぬ笑いにいつまでも揺れた。というのは、とたんに聴衆の眼がぼくにそそがれ、ぼくも赤くなってテレ隠しにニヤニヤしていたので、おかしさが二重三重になり、市長以下の別席の椅子でもみな腹をかかえてしまったのであった。

五石十人扶持は、ぼくにとっても初耳だった。少年時代から何かにつけ小田原藩とは聞かされていたが、父の口ぐせは

「さむらいの子は」であった。士族ということばがまだかすかに余命をひいていた頃である。だからぼくは、藩士というからには、百石や二百石取りぐらいではあったのだろうと、成人の後まで独りじめに思いこんでいたものである。おそらく当日の聴衆たちもそうだったのではあるまいか。いくら小藩でも五十人扶持は最下士だ、いわば足輕に毛がはえたようなものだったろう。それにしてもテレる理由はなにもないが「吉川英治氏を郷土に迎える会」が余り派手で盛会過ぎたからいけなかった。根府川関所で六尺棒を持って案山子^{かかし}みに立っていた先祖とぼくを見くらべたら、何か、おかしくなってしまったのもむりはない。あとでぼくが壇に立つと聴衆はまた笑い直した。けれど笑われたあとは一ぺんに気らくになり、それだけ親しみぶかく話もでき、ひどく愉快な会となって終った。

祖父の銀左衛門という人をぼくは憶えていない。ぼくが赤ン坊のころ亡くなったということだ。母のはなしには、まっ白なあご鬚^{ひげ}をたくわえ、嫁にはやさしいもの静かな老人で、小柄ではあるが若いときは美男だったろうと思われるような人柄だったそうである。

しかしこの祖父についての幾つかの挿話を、ぼくは父の口から聞いていて、いまでも忘れていない。じつは、よほどきびしい恐い人だったようである。五十人扶持とはいえ典型的な封建戸主の一武士であつたらしい。

ぼくは吉川^{よしかわ}だが、ぼくが育つた横浜では、吉川^{きつかわ}と呼ぶ人の方が多かった。だから子供の頃は、吉川^{きつかわ}だと思っていた。ど

っちが本当かを父にただしたらやはり吉川^{きつかわ}が昔からの姓だといった。ついでに、先祖ばなしをぼくに聞かせた。

吉川は橘香^{きつこう}という地方名が起りで、何でも富士の裾野にそんな所があつたという。戦国の吉川元春もその他の吉川もここから分れたものであり、自分の家も、関ヶ原役の前後、敵方から大久保藩を頼つて身を寄せた沢山な浪人の一人だった。だから小田原でもそれらの人間は、外者^{そともの}といわれて下士待遇以上には出られなかった。そして、大久保家へ身をよせた当初の人は法体^{ほったい}であつたが、中頃には医者も出、やがて平侍になつて銀左衛門の代まで来たのだということだった。

いずれにせよ輕輩中の輕輩だったろうが、父はぼくにはそうと云わなかった。だから父の父、銀左衛門の逸話にしても、父の都合のわるい事はぼくに聞かしていかないのかもしれない。従つてどの程度信じていいかも分らないが、父の言を疑うこともなかった白紙の幼時に聞かされたことのみである。しかしそれが後々のぼくに影響が無かつたとは云いきれない。もし、あつたとすればぼくには重大だったわけである。現代の中では理解しがたいようなものだが、ぼくを語るためにぼくの一髪をまず手にとつてみるというつもりで思い出してみる。

父の兄に、秋山という人がいた。どういうわけか、養子に出た人らしい。維新のさい、藩主の若殿について京都守護の一兵卒となつて中央へ行った。やがて解任後、小田原へ帰つて来たが、見事な花柳病にかかつていた。小田原藩士ばかりでなく、京都へ勤務に上つた藩では、どこにもそんな若侍がたくさんあつて、上方唄^{かみがたうた}の唄える侍というと、眉をひそめられたものだそうだ。

父の兄秋山氏も御多分にもれない名譽の若侍だったわけである。その花柳病もよほど悪質だったとみえ、よく落語にあるような、鼻の障子がとッ外れて、足腰も立てない重さであったらしい。そのくせ楽天家でまた小粋な人で、髪はいつも艶々と撫で、帯や着物に凝った物を着て、よく南縁に坐っては、徒然になると、柄の短い座敷簾を膝に抱えた。そして口三味線で上方唄をくちずさんでいたりした。また唯一の医薬には、軒ばに干してある馬の男根を小刀で削っては、それを煎じて飲んでいたという。そういう物が効くという迷信が行われていたのであろうか。

ところが、この秋山氏が機嫌よく病苦を忘れて上方唄など口ずさんでいる、とそこへしばしば、銀左衛門がやって来て、「この面よごし」と罵ったり、時によると、「貴様のような恥さらしはない、恥を知れ、自分で身の処置ができないなら、親のわしが成敗してやる」と、ほんとに刀を抜いたこともあったそうだ。

足腰も立てない秋山氏は、そんな時、銀左衛門のまなじりに向って、ただ両手を合せて拝んでいたという事である。いずれは、家族総がかりで銀左衛門をなだめた事にちがいあるまい。そして又、何か世間で耳づらいことでも聞くと、居ても立ってもいられなくなり「斬ッてしまふ」と秋山家の南縁に突っ立っては、秋山氏から拝まれて、拝まれ負けして帰った事にちがいない。

明治に入って、廃藩になると、この秋山氏も士分だけの一時金を政府から貰った。その金で当時の小田原の遊所に通っては「一歩だからいい。一歩だから」と、ほかの事には一銭

も費わず、ちびちびとみんな運んでしまったそうである。

子供心に、ぼくはこの伯父のうらぶれた晩年のまろい背中を憶えている。弟にあたるぼくの父の所へ、度々、無心に来ていたものである。余りにしばしばなので、父と烈しいいい合いをして帰って行く日の淋しい姿や、父の留守にやって来て、ねっちりと長居しているこの人に、母が何かと気をつかって密やかな苦勞をしぬいていた日のことなど、おぼろに思い出される。「秋山の家内です」という小母さんも時々見た。髪へ横櫛でも挿しそうな小いきできれいな人だった。父のこの兄は、父より早く亡くなった。

銀左衛門についてのも一つの話は、父がまだ年少の頃にもある。

父は、直広というが、少年時代は、丈之助とよばれていた。ある冬、風邪が流行った。母も下男も寝こんでしまい、小さい姉が夕方の台所をやっていた。

まだ十歳そこそこの丈之助は、戸外で遊びに夢中になっている。姉が呼びぬくので、ふくれながら勝手口に立つと「丈さん、良い子だから、町へ行ってお豆腐を買って来てくれな」と云う。「いやだい」と一言のもとにかぶりを振った。「そんなこと云わないで」と、姉は泣かないばかりに頼む。そして姉がすこし理くつをならべたので「さむらいの子が、豆腐なんか買に行けるかい。そんなに執こく云うなら腹を切っちゃまうぞ」と、小脇差が何かひねくって、ほんとにやりそうな真似をしたので、姉は青くなって謝った。

夕食後、銀左衛門の部屋から「丈之助、ちょっと来い」と

よばれたので、彼が入ってゆくと、三宝の上に、少し刃を見せた白鞘しろさやの短刀が載せてある。その向うに銀左衛門が四角な膝をして坐っていた。どきっとしたそうである。「丈之助、おまえ、腹を切るといって、姉を脅おどかしたそうだな。さむらいの子は嘘をいうものじゃないと常々云ってある。わしが見ているからそこで腹を切れ。おまえ、さむらいの子が豆腐など買に行けるか、といって威張ったそうじゃないか。なぜ、青くなるか。切れ」と云って、銀左衛門がねめつけた。いくら謝っても、ペソを搔いても、断じて「切れ」と云うのみでゆるさない。

家じゅうの騒ぎになった。姉はもちろん風邪ひきの母も下男もみな一室に寄って来て、丈之助の代りに泣いて詫なだびるやら宥めるやらを尽したが、銀左衛門はゆるすとはいわない、そのうちに、深夜になった。堪らなくなつて、姉や下男たちは、戸外へ走って行った。親類の者を呼び集めに行ったのだ。後から後からいろんな顔が加わった。けれど、銀左衛門は、それらの人々のとりなしにも「うん」とはいわない。そのうちに、とうとう夜が明けてきた。やっと銀左衛門も折れた様子で「では……」と云ったのが朝陽を見た頃だった。「ゆるすわけにゆかないが、親類の衆にあずけておく」それが、銀左衛門のさいこの云い渡しだったという。

その場から丈之助は叔母か誰かに手をひかれて親類の家へ連れて行かれた。よくある親類預けになったわけである。親類も貧乏だったろうし、しつけとか、こらしめの意味もふくめて、それからすぐ丈之助は、小田原から数里奥の道了さまと俗にいう山の寺房へ寺小姓にやられてしまった。――ぼく

の父は以後十四歳まで、道了権現の山の中におかれ、おかげで修学もできたが酷使されていたのだそうだ。こういう祖父と父とからつながっているぼくであった。と、時には自省してみることがぼくにはある。忽然と社会の木の股またから生れて来た者みために、ぼくは自分を取澄まして安易にうぬ惚おぼれてもいられない。

塾の明治娘

文芸家協会の会員カードを初め、よくいろんな問合せや申込書などに、略歴、本名、生年月日などの記入欄があるが、いったい、生れた月日などを、他人が何の便利につかうのだろう。ヘンな習慣である。自分自身にさえ、間違いない生れ月や日を確かめる必要などは一生の間でもめったにありはしない。

だが、何だかここではそれが必要事みたいになって来たので、明記すると、ぼくのは「明治二十五年八月十三日生」が戸籍面である。

ほんとは、十一日生れだが、届け出が二日遅れたのだそう。だ。どうでもいいようなものの、母の亡い今日、そんな事もまた聞いておいてよかったと思っている。自分だけにとつては、地球の実存以上、重大であった自分の誕生日が、あいまいもこであるよりは、やはりはつきり分っていた方が氣もちがいい。

といつても単に生れたんだという漠とした観念のほか、もの心がつくまでの何年かは、誰でも例外なしの空白である。ただ脈搏だけをしている何キロかの肉塊にすぎない。多少、記憶めいた覚えも、父母か周囲の移植であり、もし人間が、完全なる自己の出現を、自己の官能で知りたいと希^{ねが}つたら、これは煩悶に値することである。そんな煩悶はくだらないと諦めていられる人間だからいいが、よく考えてみると、癪^{しゃく}にさわることもあるのだ。なぜなら社会は無知を恥じるようにできているが、人間の口ぐせに云う「おれが」でも、「われわれ」でも、その生命の出发点から、てんで自分でも分っていない「おれ」なのだ。

発車駅の東京駅も知らず、横浜駅も覚えがない、丹那^{たんな}トンネルを過ぎた頃に簿目をあき、静岡辺でとつぜん「乗っていること」に気づく、そして名古屋の五分間停車ぐらいからガラス越しの社会へきよろきよろし初め「この列車はどこへ行くのか」と慌^{あわ}て出す。もしそういうお客さんが一人居たとしたら、辺^{あた}りの乗客は吹き出すに極っている。無知を憐れむにちがいない。ところが人生列車は、全部の乗客がそれなのだ。人間が生れ、また、自分も生れているということは、じつに滑稽なしくみである。

人権がある以前に、人間には、当人の諾否なく、その人権を附与するという人権無視がある。むかし直木三十五が苦楽かオールに書いた半自叙伝的な物の書き出しには「——いたい、おれがこれからオギャーと生れ出る所は、どんな暮しの家かと、恐^{こわ}々、おふくろのヘソの穴から外を覗いてみると、

家は大阪のゴミゴミした横丁で、おやじは古着屋らしく、無精ひげを生やして、ボロの山の中でゼニ勘定か何かしているし、おふくろはパイパイ泣く餓鬼どもを台所でどなっている。こいつあ、たいへんな貧乏長屋だ、しまつたと思ったが、もう追いつかない……」というような自嘲の人生擲^や擲^ゆを書いていた。

間に合わなくては仕方もないが、出来ることなら誰でも直木のように一応ヘソの穴から外をたしかめてから出て来たいだろう。ぼくの場合は、直木家のごとく、ほかにパイパイいっている者はなかった。ぼくの生れる前の一女子国子は生後まもなく亡くなっていた。ぼくは父二十九、母二十六という若夫婦の間に生れ、前に一女を失っている。「こんどは失くさないように」と哺育は大事にされたらしい。

といつても、母は多産の方で、ぼくをかしらに七人も生んでいるので、大事にされたといつても、あとのヒヨコが続々出て来ないまでの間であつたろう。老いての後の母のくりごとといえ「おまえ達の小さいうちは、乳にも背中にも膝にも、たかられていて、一ペンでも落着いて御飯を喰べたことはなかったよ」という育児の苦労ばなしが大半で、またそれをぼくらが聞いてやるのが母には何よりの慰めのものであつた。

ぼくの生れた当時の両親は、横浜の根岸に住んでいた。その頃はまだ横浜市ではなく、神奈川県久良岐郡中村根岸という田舎だった。家の前から競馬場の芝生が見えたということである。

根岸競馬場は、横浜に外人居留地区ができ、通商条約などが結ばれた後、外人ばかりの発起^{はつき}で創立されたというから、おそらく明治維新前からのものであろう。字根岸^{あざ}、字相沢などという部落が、急激に異国色に富む郊外として開けて来たのは、この競馬場が置かれ、また海を望む高台に、外人住宅が多く建ち並んだからだろうと思われる。

この辺の地主で、亀田某という人の借家に住み、それが縁で、亀田氏のすすめから、ぼくの両親は、一つの生活にありついていったらしい。

寺小屋、幼稚園まがいの、小さい学校を自宅で行っていたのである。元よりたくさん子供を預かったわけではなく、相沢の貧民街の子供らが対象だった。ところが、近所に住む外国人の子供たちも来るようになり、思いがけないそれは成功であつたらしい。

相沢の貧民窟から奥の丘には、日本人墓地やナンキン墓などもあつて、不当に社会からへだてられている人々が低地に部落をなしていた。地主の亀田氏は、その子たちに、深い同情をもっていた。ぼくの両親に、寺小屋をすすめたのも、その為だったろう。その貧しい子に限って、小学校へ行っても、ほかの子と差別されたり、いじめられたりするからである。

だからぼくの両親は、それらの子たちには、親のごとく慕われたらしい。また、より以上に、感激してくれたのは、その子供らの肉親たちであつたという。大げさに云えば、神さまか何ぞのように、有難がられ、月謝よりも、朝晩のように、子の親たちが、畑の物や魚などを台所へ置いてゆくので、生

活は楽だったし、よろこばれる張合いで、毎日の疲れなども、その数年は忘れていた程だったと、母は後々まで述懐していた。

それとおもしろい事に、日本人の観念のあいだには、古い部落的な差別があつても、外人たちは、無頓着だから、そういう中に、ジョージだのフランクだのという眼の青い子も、一しよになつて、日本の小学読本を読んだり、歌ったりして、けっこう仲よく飛び刎^はねていた事だった。もっとも、これは明治二、三十年頃の横浜そのものの縮図でもあつたのだ。

多くを聞かされていないが、ぼくの父吉川直広が、横浜の端ッこで、そんな国際的寺小屋の先生にたどりつくまでには、小田原の郷里を出てから後、もう相当、いろんな人生経路をふんでいたように思われる。

妻帯も、ぼくの母が初婚ではなく、その前に小田原で一しよになった先妻があり、ぼくには異母兄にあたる政広とよぶ一子もあつた。

父の先妻は、小田原の花街でも評判な美人だったということである。親類中の反対も世間の悪評も押切つて、一しよになったものらしい。これが土地でやかましく云われたのは、父の職業が、いわゆる当時の「官員さん」なるもので、県庁の酒税官であつたせいだろう。

この酒税官時代、各地の醸造家の酒蔵を視てあるく間に、父は後年の大酒になる素地と、道楽者の味境をそろそろ培^{つちか}っていたにちがいない。

けれど父その者は、祖父の銀左衛門仕込みの「さむらいの

子は」という薫陶を、そのまま無自覚にうけついで自身を、自身の真骨頂としていたらしく、一徹で、頑固で、明治時代の人間に共通な覇氣と、立志の夢に燃え、小田原の花街で、女出入りの評判を立てなどしたくせに、ちっとも、垢抜けのした青年ではなかったようだ。

よく自慢そうに、子のぼく達へ話した事のうちでも、その酒税官時代に、何でも天竜川の岸で、寒中だったそうだが——対岸の造り酒屋まで行くわけだが、よほど下流へ迂回しなければ渡船がない。それに日も暮れかかっていたので、ままと、真ッ裸になって、天竜川を泳ぎ渡って行ったが、寒中の冷たさと、流れの急に、川の中ほどで溺れ損ね、「死ぬかと思った」という事など、何度聞かされたかわからない。

要するに、若い日の父は、こんな風な単純さを、誇ってさえいたようである。その後、花柳界の婦人と同棲したという件なども、官員さん社会には、定めし指弾されたことだろう。まもなく、長野県庁へ転任を命ぜられ、長野市に下宿住居している間に、小田原に残しておいた妻が、留守の間に、男に殺されたのであった。情痴沙汰で、これは新聞にも書かれたりした為、父は面目無さに、辞表を出し、それきり官途もやめ、数年は小田原に帰らず、放浪していたらしい。

父は南画をよく描いた。ちょっとした山水や蘭菊などを黄大癡風に画いて、牛石、逸民、石声などと雅号を入れていた。漢詩も得意で、ちょっとした葉書や手紙ぐらいは、筆がなくても、マツチの棒とか小楊枝の先をちよっと嚙んで、竹筆のような味の文字をすらすら書いた。

少年時代を道了権現の寺房で送ったお蔭だよく云っていた。しかし、大胆なものである。それッぱしの余技をもとで、長野県庁をやめた後は、一年余りを画家と称して遊歴したのだといっていた。父の描いた余り上手でない墨蘭や四君子などを、ぼくも子供の頃、よく見たものだし、柱掛けだの額面などを人から依頼されると、これは大得意で、誰にでも描いてやった。出入りの大工が「旦那の御きげんの悪いときには絵をお願いするに限ります」と、母に云ったそうである。

二年余りの放浪後、小田原へ帰った後は、箱根山麓の附近で、父は牧畜を始めたのだった。横浜という黎明期の開港地に接して来て、刺戟されたにちがいない。「これからは、外人相手の仕事でなければ」というその頃の土族の頭脳としては、飛躍的な思いつきから、それをやった。そして、それも見事、親類や土地の人々から、土族が、けものいじりするとか、土地を穢すとか云われて、徹底的に嫌われ、とうとう又、小田原を追ッ出て、牧場を横浜市外の太田新田という所へ引移したものである。

父の横浜移住はそれからで、その頃でもまだ、食肉を屠殺するには、屠殺場の四方に笹竹を立て、シメ縄を張って、神主にのりとを上げて貰ったりしたそうである。けれど、これも長つづきはしなかった。俗に「牛ペスト」といわれた悪性な伝染病が流行し、その猛烈な蔓延から牧場の牛をあらかた失ってしまったのだ。毎日のように、空井戸を掘っては、病牛の屍を埋めるのが仕事だったほど辛い時代はなかったと、父はよく後々まで述懐していた。多少、そのあいだに、もちま

えの一徹や野望の角も撓められ、一思案の時期に入ったのではあるまいか。

その頃、横浜初音町の辺で開業していた漢方医の吉益某の媒人で、新たに妻として迎えたひとが、ぼくの母、山上いく子であった。牧畜経営に一攫千金の夢もさめ、大小の開港場成金は横浜に簇生していたが、父には失意の時代であったようだ。

後年、父と母とが、夫婦喧嘩などやり初めると、母が咽びながら「わたしは、吉益にだまされて来たんです」と口走り、父はすぐ「いつ、だました、吉益を呼んで来い」と威猛高に云ったのが、いまだに耳に残っている。

漢方医学の上では、江戸中期に、吉益東洞という名手が出、吉益派といえば、落ちぶれても名家の末のわけで、媒人の吉益氏もその系流とは聞いていたが、じっさいの血をひいていたか否かはわからない。けれど、いかにも言語風采からして昔の漢方医者らしい小父さんであった。ぼくら子供は、どこからか帰って来て、わが家の玄関に、白い鼻緒で畳附のぼっくりみたいな男下駄が揃えてあると、また父母が喧嘩してるナと直感して、家に入らず外へ舞い戻ってしまったものだった。

父とのいさかいはよくやったが、母は明治の庭訓に培われただけの典型的な古い平凡な日本の女の一人でしかなかった。そのひとが、世間も何も知らずに、吉益老の仲人口を信じて、素寒貧の父へ嫁いできた事情には、どうも母の云い分の方が本当らしいものがある。母の「わたしは騙されて吉川家

へ来た」という口走りにも、そのときの感情で、多少、母にも云い過ぎがあるかもしれないが、しかしそのつど、ヤブ井チク庵の吉益老夫婦は、母をなだめたり、母に詫びたり、ただもう平謝りが常だった。

だからどう公平に考えても、このチク庵夫婦が、世間知らずの明治娘を、ある程度、仲人口に乗せて、東京から横浜のような烈しい開港地の、しかもこれという勤めもなく、ただ甚だ特異質的なきかん気だけを持っていた一青年の所へ、嫁入り道具万端持たせて、一しよにさせたという事には、むりがあったにちがいない。母が生涯を通じての、悔いであつたろうと思われる。

じっさい、子供心にも、おぼろに、そう考えて、母に同情し、母と一しよにわけもなく泣いたものだった。けれど、母の悔いにもかかわらず、この仲人口のムリな結合から、ぼくらは両親の仲に生れた。しかもぼくらは、母が生きるに疲れ果てて、燃え絶える最期まで、母からはただの一言でも、愛の伴わない言は、聞かされたことはない。

母の郷里は、千葉県の佐倉で、古くは堀田相模守の領である。生家は代々その堀田藩士であった。ぼくらの童心の印象に深い「おじいさん」つまり母の父は、山上弁三郎といった。

戦争中であつたが、千葉刑務所長で名物男の根田兼治氏に誘われて母の生家のあつた印旛沼の上に佇み、小学校で講演したり、縁家の佐藤氏の案内で、菩提寺へ詣ったりして、一日を過したことがある。

菩提寺の山上家の墓碑は代々一基ずつ並んでいて、その古

さや型からも、ほぼ家格の想像もつくのであるが、そのときも、これは母がよく愚痴をこぼしていた悔いは本当だろうと思ひ合せた事であり、小田原藩で五十人扶持の小身だった父の里方とは、だいぶ趣がちがうのである。

母の父弁三郎は、廃藩後も、臼井町の町長に推されて、酒席や平常の上でも、すこぶる豪放磊落な人で、郷党たちにはひどく敬愛されていたらしい。佐倉でぼくの為に招宴を設けてくれた当夜の人々の間でも、ずいぶんいろんな逸話や思い出が語られた。

酒を愛し、郷人を愛し、いつも春風駘蕩といったような大人風な好々爺であつたらしい。ぼくの母は子沢山の中の四女で、名は、いく子であつた。

土地の女学校を出た後、母は、その頃芝の新銭座にいた国学者でまた南洋学の先覚、近藤真琴の家庭へしばらくやられていた。

近藤家との縁は、母の姉山上豊子が、鳥羽出身の斎藤恒太郎（当時、近藤塾の外語教授）に嫁いでいたので、おなじ鳥羽藩士の近藤真琴と斎藤家の縁故からと考えられる。豊子は、ぼくの母をまたなく可愛がっていたので、妹をそばへおきたい気もちから東京へ連れて来て、近藤家へ見習いに頼んだものようである。

航海測量練習所と称した芝新銭座の攻玉舎は、勝海舟などの育成していた幕府海軍操練所の遺産といつていいようなもので、初めは近藤塾と共に、鳥羽藩の邸内にあつたのを、後に、芝新銭座に移し、やがてこれが海軍兵学校の嚆矢をなしたものである。ぼくの母は、いずれその小間使か、塾の手

伝いみたいなことで預けられたのではあるまいか。母はよくその頃の愉しかったことを、さも懐かしげに、ぼくらへ聞かせた。

母の容姿は、ちつとも、きりよう美しの方ではないが、小づくりで俗にいう抜けるほどの色の白いひとだった。攻玉舎にいた時分も、海軍志望の若い塾生たちからかわれ、おいくさんと呼ばれないで、お雪さんお雪さんと愛称されていたというようなことを、もう何人も子を産んでから後も、恥かしげにぼくらへ語ることがままあつた。

そんな母が、どうして、横浜へ嫁いで来たのか、その間の事情は、理解がつかない。父の云い方を想像すれば、仲人口などではない、見合のとき、おれの男前がよかったから、一も二もなく、おれを未来の良人と、たのもしく思つて来たのだらうと、云うかもしれない。

ぼくは母似か、人いちばい、体も小さく背も低い。しかし父は背丈けもすぐれ、骨格のいい人だった。壮年の時は、部屋のかもいに頭がつかえそうなので、ふすまを開けると、ちよつと頭を低めて入る癖があつた。ぼくが父に似ている肉体上の個所は、下唇の左下がりにあるほくらだけで、父のは、もっと大きかった。

とにかく、こうしたぼくの両親であり、その仲の二番目に生れたぼくは、根岸競馬場附近の、奇異なる国際的寺小屋を営んで生計とする家で、眼玉の青い外人の子や、日本の子等と、魚交じりに交じつて、四つ頃まで育つたのだった。

いま考えると、わが家が、こんな雀の学校をやり初めたの

は、家主の亀田氏の懇望でもあったろうが、もうひとつ、母が近藤真琴の家庭にいたことも思いつきとなる一因ではなかったろうか。多少なり、娘時代の母は、攻玉舎の塾風とか教育の愉しさをみたいなものに感化されていたろうし、そして、それなら自分にも手伝えるという自信から良人にすすめ、そこで夫婦共稼ぎの気もちで初めた仕事ではないかと思われる。けれど、父が横浜へ出て来たのは、もともと、そんな志ではなかったから、ぼくが四歳の末頃にはもう家もモンキの坂とよぶ横浜石川町辺に移り、父は港町の魚市場の書記に通っていた。

童戯変遷

“始めに言葉あり”だが、個人にとっては、記憶の最初が、自分の歴史の肇^{はし}めと考えるほかはない。記憶以前は、すべて個人の太古で、いわば赤ん坊^{かみよ}の神代である。

オタマ杓子の脱皮のごとく、その神々が人間の児に化けて生涯に入る旅券を持ち、第一の記憶なるものの作用がぼつんと起る。それから神の眼でいう罪の映像がかさねられてゆき、自己と周囲の実存をおぼろな構成で脳細胞に移植してくるものらしい。

よく座談のはずみで「いったい、生れて初めての記憶といったら何だろう。幾ツぐらいから、どんな事を覚えているか」などと他愛ない話題にふけることがあるが、誰の云い出すこ

とも必ずみなまちまちである。人間は何歳にして記憶を持つ、という定義はないようだ。トルストイの自叙伝をはじめ幼時を書いた人々のものを見てもすべてそうだ。これは、雑誌か何かで一度ひろくアンケートをとって見たらなお立証できるとおもう。

だから、非凡であろうとする思想家や文学者などは、この中途半端な起点記憶から幼時を語るのは、つまらない気がするのである。オタマ杓子やボウフラと何ら異なることのない自己の起源に対し、その空白を空白のまま無知でいるにも耐えないのであろう。そこで必然に、記憶前の記憶へまでさかのぼって、自己を描こうとすることにもなる。

ヨハネ伝の“始めに言葉あり”も、仏教の“父母未生以前”も、神道や儒教の説明も、みな人間の記憶以前の記憶にその発想を一つにしている。同時にそれが宗教の誕生といってもいいようだ。その前提を意識界に据えた上でなくては愛も罪も説きえないからではあるまいか。とにかく人間は各々、ボウフラではなく、永劫の時と生命のクサリの一つに自分もつながっている一環だということを、しっかり、知りたがっているのである。それを自己確認しないではいられない者なのだ。というよりは生れた意味もこの生命の真を味わうことができない。また不安でならないというのが、人間あらましの本音ではあるまいか。

歴史はそんな本能をもつ前人たちの累積であり、それを継承する歴史家や作家の仕事にもそういう要素はもっている。だから往々、作家の書くものには、前にもいったような、記

憶以前の自画像が現われて来たりして、読者をして奇異な感じに面喰らわせるばあいがなくもない。

三島由紀夫氏の「仮面の告白」だったかに、自分が生れたとき産湯を使わせられた盥^{うぶゆ}の木肌を透して、まばゆい湯の揺れや金輪の光が金色に見えた、というような描写があった。また長谷川如是閑氏の「心の自叙伝」の序説には、自分が胎内にいるときの感覚をもっと精細に書いている。産婆の手でつかみ出されて、産湯の上で縦横無尽に振り廻されて眼が廻ったとき、その硬い手の残虐さに対する憤りと、無性な恐ろしさに襲われて、思わず初めて絶叫を發したという風にである。

もちろん、こういった例は、記憶ではない。文学である。が、その底流にはやはり想像を借りた人間共通の意欲が見られる。モームの「人間の絆^{きずな}」にしてもそうで、たとえば「人生に意味などは何もない。ただ環境への物理的作用として現われたものに過ぎない。生も無意味、死も無意味、ひっきり人生は一つの模様意匠だ。行動も感情も好みの意匠で、織りなしてゆけばいい」という。しかし、その割切った考え方に到達するまでには、彼もおなじ空白への想像や郷愁をついて書いているのである。そしてモームがやっと見つけたという虚無の安住なる居場所であって、哲学的科臼^{せりふ}が、どうかすると東洋の禅坊主の喝破や隱棲者のつぶやくと一致したりしているのは思想上の奇観でもある。つまりこんな問題は、各人各種にどう考えようと自由だし、また考え得られるし、といて誰にも極め手はないということだろうと思われる。

ぼくは自分をそれ程とは思っていないが、本質のぼくはよほど女好きなのだろうか。ぼくのこの世における最初の記憶といえば、女の映像なのだ。きれいな女の人である。

幾歳の時だったなどというわけにはゆかない。何しろぼくはまだ、ねえやか婆やかかの中に負ぶさっていた。母の乳を離れていなかった頃でもある。

その頃うけた記憶として、こういう事象が、後々まで、脳の深部にありありこびりついている。

ぼくは誰かに負ンぶされていた。そばに石だんがある。その石垣の上に、緑色の窓があつて、その塗料の色だけがほかのどの映像よりもくつきり濃い。

そこへ向うから女のひとが歩いて来た。きれいな女のひとだった。負ンぶされているぼくの頬へ頬ずりした。そして、「子供の乳の匂いって、いいもんだわねえ」と、誰かに云った。

——ぼくの最初の記憶というのはこれだけのものだ。奇妙に思えてならないのは、まだ自分が乳^ちのみ児だったのにといいう疑いである。錯覚であろうかと、母の存命中、母にただしてみたこともある。すると母はこう云った。

「それは、うちがモンキの坂に住んでいた頃なんだろうね。石垣の上に玄関があつて、以前、異人の牧師さんが住んでいたから、ふつうの日本家屋なんだけれど、窓なんか洋風に青ペンキが塗ってあったりしたからね」

こう聞くと、錯覚でもないらしい。かぞえ年四ツ頃まで、乳もしゃぶっていたし、小粒でひよわい子だったぼくは、まだ負ンぶされていたらしい。

それにしても、女のひとがきれいであったという事やら、その女の会話があとさきなく、ぽつんと耳に残っているのはどういふものだろう。その理解が出来なくても、単語として、あるいはただの音として、音感の記憶には残るものなのかどうか。自分では解釈のつけようもないくせに、心のどこかでは、これがさぐりえた自分の最古の神話のように、事実であったと信じていたい気もちが妙に手伝うものであることも否みがたい。

最初の記憶につぐ第二の記憶では、ぼくはもう歩いている。五ツ前後であろうか。

後に、父の会社で息子を使っていた出入りの大工の家が近くにあった。ぼくは母の膝に戯れながら、母と大工のおかみさんの話をそばで聞いている。

ここの家は子沢山だった。おかみさんは、自分の子供の一人が描いた絵を持ち出して来て、母の前へ自慢そうに見せる。ぼくも一しよになつて絵をのぞきこむ。

鉛筆描きの船の絵だった。煙筒から煙えんとつが出ている。マストだのタラップだの、それはぼくら横浜の子供は朝夕に見ついている港内の汽船みたいだが、船首と船尾に大砲を付けることを忘れていない。大砲の口からは火が発しているのだ。火だけは赤い色がつかってあった。それとマストの日の丸も太陽みたい塗ぬってあった。

その時の、母が云った言葉である。画学紙の絵を手にとつて眺めながら母が、「うちの、はやくこんなに描けるようになるといいんです

けれど」

単にこれだけの事にすぎないが、妙にはっきり覚えていたのだ。

日清戦争は終つていたが、なお童心の世界にまで、世間の色や物音が尾を曳ひいていたものにちがいない。

やがてぼくも自由画らしきものを描き初めたが、船を描けば日の丸と大砲を付けなければ気がすまなかったし、板塀や地べたへ白墨で落書きするにも、何か大人の影響を現わしていたようにおもふ。たとえばチャンコロといったような言葉をよく投げ合つたものだし、童歌の世界では、その頃までなお「日清談判破裂シテ……」などという今から思えば滑稽なほど粗朴な軍国調が歌われていた。それが「雪やこんこん」だの「オオさむ、小寒、山から小僧が降ッて来た——」などというものと、何らの差別もなくただ叫ばれていたのだった。

童心への影響で、いちばん直接的だったのは、風の絵たて、メソンの絵などであつたと思う。児童雑誌というものはなかったし、活動写真は明治二十八年の八月かに、大阪南地の浜座で公開したのが日本で最初といわれている。だからぼくらの前にはまだ来ていなかったし、幻灯を見せられてびっくりしたのさえ、よほど後であるような気がする。

童戯の変遷は、社会相の変遷といつてもよい。ある時は、一般がまだ気づかない先に、大人の世相を童戯に教えられたりするばあいもある。けれど又、童心の世界には根づよい自然の伝統も流れている。大人の生活とか治乱には関知せず、独自の別天地を劃然と持っていた。それからいえば、童戯不

変と云えなくもない。

かりにそれを伝統児戯とよぶなら、ぼくらが幼少にやった遊戲の種類はみなその系統であつたろう。メンコ、根ッ木、ブランコ、縄飛び、ラムネの玉遊び、コマ、凧、石蹴り、石鉄砲、竹馬、金輪廻し、吹矢、当て物、隠れンぼ、かるた、十六ムサシ、といったような類である。種目は思い出せないほど多い。しかしすべては、野放しの童心と、子供相手の駄菓子屋やおモチャ屋との合作に依るもので、社会人の文化的考慮などは、影も映していなかった。道路はどんな大通りでも舗装はなかったし、電灯はまだ家々のものではなかった。馬車道とか海岸通りなどに、青い瓦斯灯の光が見られた頃にすぎない。

遊びの中で、もっとも熱中したのは、メンコ、根ッ木、石鉄砲などだった。ぼくらはメンコの絵によって、源義経だの福島中佐などを知り、また見てもいない団十郎や菊五郎を知っていた。家の近くに法華寺の清正公様のお堂があり、そこのお堂の縁をメンコの道場として夢中になった。紙メンコと鉛メンコとがあったが、紙メンコの裏表に、ロウソクの蠟をこすりつけて磨くと、すばらしい光沢と重厚感が出て来るので、よくお堂の祭壇からロウソクの燃え残りを持って来ては板の間でこすったりした。

メンコの遊び相手に、名は忘れたが、近所の医者の子が あった。日が暮れると、このお医者さんは、門の外に立って、山伏みたいに大きな法螺貝を吹き鳴らすのである。この法螺貝の音を聞くと、ぼくのメンコ相手は、すぐ顔色を失って飛んで帰って行った。ある時、ぼくが見ていたら赤い紐で法螺

貝を首に掛けたそのお医者が、舞い戻って来た息子の襟がみつつかんで、お尻をぴしゃぴしゃなぐっていた。ぼくは自分が打たれているような罪悪感に襲われた。

どこの家庭でも、メンコや根ッ木みたいな博奕的遊戲は、決していいとはしていなかった。ぼくなども隠れてやっていたのである。社会そのものに児童への指導も関心もなかった。家庭の責任はその全部であつた。自然、児童にたいして、家庭はきびしい所でないわけにゆかなかった。

月の晩である。小高い住宅地の一面に、一つ一つ生け垣につつまれた低い屋根が見え、黄色がかつた鈍いランプの灯火があちこちに洩れている。

この界限では、どの家でも職業として、日当りのいい出窓に机をおき、種々な輸出物の地紙に胡粉絵を画いていた。何に使用されるのか、いづれ皆、弁天通りの輸出商が居留地などへ行くものであろう。チリメン紙だの、扇子の地紙だの、日傘や岐阜提灯などに、花鳥や富士山や鳥居などが、職人的手法で、おもしろく描かれてゆくのを、ぼくらはよく、窓の外から背のびしながら見惚れていたものだった。

この近所での遊び仲間、そうした職人絵描きの子だの、牧師の子だの、医者や勤め人といったような家庭の子供達だったが、その晩は、どうして夜まで遊んでいたのか、ぼくらは、野良犬のひとつかたまりみたいに、まだ遊び呆けていた。そのあげくだったと思う。ぼくらより年上で、章魚とアダム名していた子の周りへ、みんなが円くなって集まった。

何か秘密めいた興味がぼくらを燃やしていた。タコは杉垣

根をうしろに腰かけ、衣服の前をあげはだけで、土瓶の口ほどな小さな性器をぴんと立ててみんなに誇示していた。

どういふものか誰も笑いもしなかった。まじまじと、見まもりあっていた。そのうちにタコは腰をにじらせて少し位置を更えた。月の光がうまい工合に彼の股間へ青白く射しこみ、奇妙な物が一そう鮮らかに見えたので、そのとき初めてみんながクンクン鼻を鳴らして笑った。するとタコが誰かに「舐めろ」と命令した。「舐めないとぶんなぐるぞ」と脅した。云われた者が犬ころみために四つん這いになって、タコのそれを口に入れた。タコはまた次の者に命令した。順々に四つ足じみた背中が引つ込んでまた次の背中でタコの前に出た。正確にいけないが、ぼくは五ツか六ツだった。でもこの晩の印象は、ひどく鮮明なのである。ぼく自身にはタコの前に匍匐した覚えは残っていない。おそらく逃げ帰っていたのであろう。しかし、性器について何か意識を灼きつけられた最初の経験であったことはまちがいない。

野放しな児童のあいだでは、遊戯以外、どうかすると、こんな気まぐれも行われていたのである。タコの心理や環境などにも、学問的にはいろいろ云えるだろうが、大人の頭脳では分析のつかない点もある。電灯がなくランプ時代の暗さというものをもう今日のぼくらは思い出せなくなっている。原因のひとつは、世間の暗さにあったように思う。それに適合して、どんな暗闇でも、蹴つまずかずに飛んだり匆ねたりしていた、いわば野性の子達であった。

ぼくの家はよく引越した。青い窓の家から、もっと坂の上の、そして前より広い家へ移った。

門を並べて、すぐ隣りは、郵船会社の小沼さんだった。勤め人が立派なものに見えたのは、小沼さんの出勤ぶりを見てからである。毎朝、お迎えの人力車が来る。美しい鼻下の髭と金ぶちの眼鏡に、葉巻のにおいが流れ、小間使が、膝まで手を下げて見送っていた。

まもなく、また、その後から、ふつくらと色白で、ぼくを見るといつもほほ笑みかけてくれる奥さんが、どこかの女学校へ出勤してゆく。奥さんは髪を流行のイギリス巻にしていた。和服のときは袴に靴をはいて出かけ、洋装にはネットで顔をつつんでいた。自分に子が無かったせいか、ぼくはこの小沼さん夫婦にたいへん愛された。日曜日というとき極つて「大将サン、遊びにいらっしゃい」と、呼んでくれる。どういふわけか大将サンとぼくを呼び、御馳走してくれたり、汽船の模型やら、豪華な背皮の本を見せたりしてくれた。

よその違った家庭様式にたいして、児童の嗅覚は、大人の考えている以上、敏感である、色の白い奥さんの頬の黒子が絨緞の模様までを、思い出すことが出来るし、ある折、ぼくを独り遊ばせておいて、奥さんと主人の小沼さんが、ピアノかオルガンの前で接吻した姿がいつまでも幼い眸に残った。今でも、外国映画などでおなじシインにぶつかると、それが小沼さん夫妻に見えるような錯覚がふとのぼってくる。この小沼夫妻の隣家にも、長くは居なかったようである。こんどは少し遠くへ越して行つた。山手の植木会社の裏門前で、何万坪もある植木畑や花畑に垣一重なので、広い庭園の中にあるようだった。

引越すたびに、家はだんだん大きな家に変っていた。何

も知るべくではないが、この期間に、父は魚市場の書記をやめた。そして、いずれ今でいうブローカーであろうか、羽二重の輸出とか生糸の売買などに首をつっこみ、開港場成金を夢みてか、さかんに居留地の商館や税関あるきなどしていたらしい。ほどなく、それが縁となって、その頃、横浜の実業界では有力な一人物だった高瀬理三郎氏に知られた。高瀬氏や二、三の実業家と、横浜棧橋合資会社というのをもくろみ、創業に熱中していたのである。棧橋に繋留する外国船の荷揚げとか、石炭食料の補給、貿易品の商社幹旋、何でもといったような建てまえの事業らしかった。

これが当たったものであろう。父の生活は小沼さんの家庭より派手になった。母の身なりも美しくなり、婆やも女中も何人かにふえた。けれど、それによる不幸の感じは季節の変わりども子供のぼくにはわからなかった。遊びざかりの腕白になっただけである。ある日の夕方、相沢の町通りで、市中からぞくぞく帰ってくる汚穢屋の馬力車の後ろにブラ下がつて、ガラガラ揺られてゆく快感に興じていたことがある。このわるさは、どこの子もよくやる事なので、かねて汚穢屋も心がけていたのにちがいない。次第に馬力車を走らせておいて、そして突然、馬を止めた。その震動で、汚穢桶の物が溢れ飛んで、ぼくは頭から全身にそれを被ってしまった。どう帰ったか覚えもないが、井戸端へ連れて行かれて、母や女中たちに、何十杯もの水をかぶせられた事だけは忘れがたい。物質的に父母の家庭はよくなって来ても、ぼくの野性にまではこのように何の変化も及ぼしていなかった。

白紵

ぼくは七ツ。やがて千歳町の「横浜市私立山内尋常高等小学校」という長い校名の懸っている小学校へ通学し出した。戦後の横浜は、まったく旧容を失ったが、その頃、植木会社の裏門から千歳町へ通うには、文字どおり山坂越えての半里はあった、植木会社の園内だけでも、幾カ所となく上り下りの屈折があり、その表門を出て、桜並木とよぶ山手通りへ出、遊行坂を降って車橋を渡る。そして町中の水天宮さまと隣りあっている私立小学校のペンキ塗りの校門をやっと見るわけだった。

横浜市誌の類にも、横浜植木会社のことは、とんと見当らない。けれど、当時の居留外人にとっては、最も印象の深い一名所ではなかったろうか。日本中の花卉花木を集めた植物園といったような広さである。いま憶うと、社屋のある表の鉄門のわきに、赤煉瓦の倉庫が幾棟か見え、いつも倉庫の口から百合根を荷馬車に山と積みこんでいた。当時海外へ、日本の百合根がさかんに輸出されていたため、あんな大きな花屋の経営が成り立っていたのかもしれない。

それにせよ、花卉の高い香いと花樹の妍を主としたあんな広大な花園を、ぼくは日本の中では他に見たことがない。それと横浜生れの通有性で、外人の男女へ物珍しい眼をする子

供ではなかったが、ここの園内を拾い歩きながら、園丁に牡丹を剪^きらせたり藤の花の大きな鉢を抱えさせて、なお去りがてに、躑^{つづ}躑^じや燕子花^{かきつばた}のあいだを逍遙している金髪美人や同伴の老紳士といったような外人達には、何か高貴めいた感をおぼえたものである。あたりを舞うアブや蝶々までが、翼に香氣を放ち、からだに光をおびているかのように見えたりした。

園内の道は、もとより一般の通路ではなかったが、ぼくは下町への学校通いに、裏門から表門へ抜け、毎日そこを往復の近道としていた。母は毎朝、躑^{つづ}躑^じや石蘭や雪柳が崖をなしている坂道を駈けまろんでゆくぼくを家の門から見送って「：まるで鉄砲玉みたい」と、ほほ笑んでいた。ぼくはその頃から、よくよく小ッぽけな子であったとみえる。

そして当時、日々の往復に、ぼくは四季の花々から無自覚に後年の何かを教化されていたのではないかと思っている。成人してからも、特に花好きだの園芸好きなどという嗜好^{しこう}はないが、どういう場所に限らず、たとえば会合の食卓などでも、ふと卓上の花の香を嗅ぐと、一応すぐその頃の追憶へ連想をもって行かれてしまう習性がある。毎日を、花の香に染められて通った頃の童心の幸福感が、老いたる今もどこかに潜んでいるものだろうか。以後、長じて人生の辛酸な道へ出てゆくほど、そのなつかしきは深くなっていた。

根岸競馬の帰り途であった。戦争の初期である。ふと洩^もらしたばくの回想に、連れの菊池寛氏が「じゃ、廻^もってみようか」というので、心当りの辺をうろついてみたことがある。しかし、その頃すでに、植木会社の花園はあとかたもない。

ゴミゴミした狭い横丁へ車を入れて行き惑い、菊池氏にさんざんぼやかれた事がある。

それからまた、終戦後、小石川の大曲^{おおまがり}で、はからずも横浜植木会社と看板のある埃ッぱい花卉店のウインドを見かけた事があった。これがぼくのなつかしい記憶にあるあの花園の後身だろうかと思いつきながらも、しばしその前を立ち去りかねた。考えてみると、世相の騒音も、日本のありかたも、明治から大正、昭和とガタ落ちな変り方をしているわけで、時流の縮図を、半世紀後の路傍に見たまでの事で、それを不審がる自分の老いには気のつかぬおろかさ、われながら自嘲を覚えたことだった。

まあ、こんな風に、植木会社の裏門時代は、ぼくにとって、故郷のうちの故郷といったようなものだった。キザな云い方だが、人生への初恋頃といつていい。

そこでの友だちは、園丁の子の市ちゃんと洋傘直しの家の徳ちゃんだった。この三人は、余り花園では遊ばなかった。程近い相沢の町通りへ出るウラに、有名な貧民窟の一郭がある。『いろは亭』という汚い寄席の看板の下から狭い横丁のドブ板とそこの屋根全部であった。通称『いろは長屋』と呼ばれていた。そこには、どん底生活の百態が軒をならべている。住民はカンカン虫、お茶場女、ナンキン墓の墓番、大道芸人、チーハーの運送屋（シナ風の富籤）、屠殺場のアンちゃん、夜蕎麦売り、といったような有職無職の人々である。とても戦後のハマの風太郎やニコヨンとよばれる人達みたいな清潔なものではない。その不潔さにも貧乏ぶりにも、やはり隔世的な差があったように思われる。

ところが、ぼくら子供は、いろは長屋の極貧の密林帯に、花園にはない禁断の実を嗅ぎ出していた。メンコ以上に博奕的でスリルのあるアテ物とか玉ツブシなどもその中の駄菓子屋で覚え、モンジャキとか、犬だか豚の臓物だか知れない怪しげな串焼の味も知った。もうそろそろ通用価値を失いかけて家庭でも粗末にしていた穴アキ銭とよぶ文久銭やら寛永通宝の古い貨幣も、そこへ持ってゆけば立派にテッポ玉（飴）一個と交易された。

すべて、いろは長屋の人々は、始終、生き争う物音の中に暮らしていて、夏は男女とも真ッ裸同様だし、平気で猥雑な行為は見せるし、どこかの軒では必ず夫婦喧嘩をやっているし、それでいてぼくらには危害を加えないばかりか、みな親切なのである。すべてにカーテンのない自由でそして原始の儘な解放地区そのものみたいに、子供の眼には見えた。

もちろん、ぼくらの親は、口を酸ッぱくして、ぼくらがそこへ立ち入ることを固く戒め、見つかるとうすぐ家へ連れ戻されたが、なお、いろは長屋の魅力はしばしば子供に親の眼を偷ませ、茶の間の小銭を手品のごとく掻き消えさせた。一体、それ程なその吸引力は何だったかを、今考えてみると、じつは、いろは長屋そのものに特殊な誘惑があったのではなく、本当は、子供にとって、当時の家庭は、余りに清潔すぎたただけの事である。家庭では禁断にされている未知の実をぼくらは猿の木渡りみたいに探り歩いたのだった。

ぼくの旧作に“かんかん虫は唄う”という中編物がある。あの“いろは長屋”とか、カンカン虫のトム公などは、つま

りぼくの逍遙した所の幼時の記憶が生まれめた幻想で、多少のモデルは有って書いたものだが、トム公は、ぼくではない。その極貧窟のいろは長屋から、すぐ一側表の通りには、山手の異人街から根岸競馬場やナンキン墓方面へ通じる一すじの町がある。その相沢と呼ぶ町通りにも、ぼくは当時の風俗詩的な思い出を幾つか新たにすることが出来る。わけて鮮やかに思い出せるのは、在留シナ人の葬式と、明治天皇行幸の鹵簿であつた。

もうあんな中華の古典的葬列の色彩は、現在では中共の奥地でも見られまい。柩の輿は、金箔と五色の泥彩で塗られ、大勢のシナ人が舁いで行つた。刺繍の袍みたいな衣服を着た道士だの祭司がそれを繞り、前後には、竜頭の弔旗や幡が林立してゆく。また、供物とする豚の丸揚げを担ってゆく者だの、親族縁者らしき人々が、えんえんと人力車をつらねてつづくのだ。中でも一つの車上には、髪をふりみだした“泣き女”と称する女性が、それこそ誇張でなく、白昼の下に、声をかぎり号泣をしつづけて行くのである。

行列の中では、銅鑼が鳴り、鉦が叩かれ、泣き女の異様な啼泣と相和して、それは何とも不思議な音階を町に流しつつ練り歩くものだった。居留地の南京街でも、豪商とか何とかいわれる著名人の葬式でもあると、泣き女も一人や二人ではなく、彩旗はへんぽんと相沢の町に続き、五色紙の散蓮華や餅菓が路傍の見物人へ撒かれたりして、ぼくら子供は、その演出と天来の奇観にはしゃぎ立って、ぞろぞろ葬列の後について駆け歩いたものだった。

その日の子供とは、全くべつな児童みたいに、行儀よく整

列して見たのは、しばしば、この狭い貧民街を通られた明治天皇の鹵簿である。

明治天皇の競馬好きは内外に著名であった。春秋の根岸競馬へは、前後十数回も行幸があったことかと思う。祭日か日曜日なので、ぼくらは学校の先生に引率されていたわけではないが、みんな日の丸の小旗を持っていた。いろは長屋の住民から町の男女の立ち並ぶ中に交じって、四頭立てオープン菊花紋の輝く御馬車へ、歓呼と共に紙旗を振りぬいた。

道幅がせまい上に、両側の厚い人垣が押し合うので、陛下の鹵簿と群集とは、ほとんどスレスレな間隔しかない。どうかすると、後ろから揉み出された人波の凸出に、先駆の儀仗兵の馬が刎ねたりして、御馬車が行き淀んだりするのである。それはまた、ぼくら子供たちの歓ぶ事であり、その間、なお紙旗を打振って叫ぶのだが、手を伸ばすと、両側の紙旗は、陛下のお体にも触りそうなくらいであった。御馬車はオープンなので、陛下はお顔のそばに拳手の白い手袋をおかれ、時々、左右へ向って微笑されたりした。——そして競馬場のグランドの空には、打上げ花火がさかんに鳴る。——といったような風景が、遠い明治の一日として思い出される。

そうしたぼくら明治の人間の先入観では、大正、昭和にわたるあの物々しい、超警戒ぶりは、何ともわけが分らなかった。街頭の群集をみな敵と視るような、あの冷やっこい鹵簿の列と、幼時の印象とは、隔世の感があった。

戦後は天皇も民主風になられたとはいっても、なお相沢の貧しい民衆と陛下との間に見られたような風景はどこにもな

いと思う。たとえば各種のスポーツや競馬などに、天皇杯や天皇賞は贈られているが、賞と共にグランドに臨まれることはないし、その民衆と一しょになって共に一日を遊ぶという時間もお持ちになっていないようだ。

ちよっと一例までに、明治編年史の中から同三十二年五月に明治天皇が根岸へ行かれたときの国民新聞記事を抽出してみると、こんな風に掲載されている。

——かくて午前十時を過ぐる頃、根岸競馬場に御着あらせられ、暫時御休憩の後、天覧場へ入御、下賜せられたる銀製花瓶と、青木外務大臣夫人の賞品七宝花瓶とは、馬見所の玄関に飾られ、誰人がこの名誉の賞品をうべきかは、当場所第一の談柄なりき。

なほ陛下の御下賜賞以外に、「北京賞盃」もありて、勝利馬二百二十五円、二着馬五十円を付したる第六回競馬は、かくて午後三時発馬と注せられたり。

アールフィルド氏の	トルトイス
同	テラビン
ヒヨゴ氏の	イクブチ
ラシヤ氏の	チンギス
ニシムラ氏の	アヅマ
スターライト氏の	マース

六頭は今日を晴れと、一哩半を競ひ、さしも広き芝生も数万の内外人に充され、英国軍艦バアフロア号乗組員が奏する勇壮なる楽隊と万雷の如き喝采の中に、勝は西村氏のアヅマに帰したり。

ぼくの父は馬は持たなかったが、経営している横浜棧橋合

資会社は、外国人との折衝が半ば商売みたいなものだから、根岸倶楽部にはよく出入りしていたらしい。ぼくも競馬はたびたび見せられ、家庭でも競馬の話に賑わった。まだ横浜競馬も初期だったせい、一般にも競馬を汚れたものと見るふうはなかった。特に、天覧競馬のレース当日などは、横浜中の祭典といってもよかった。市中もその話題で持ちきって、スペインの牛祭か何かのような騒ぎだった。

ついでに云うが、その頃の名騎手カンザキの名は、ぼくら幼童の耳にも、英雄の如きひびきと憧憬をもたせたものである。その神崎騎手の名を、もう遠い過去だからと思って、実名のままぼくの「かんかん虫は唄う」の中に登場人物としてつい書いた。ところがその後、神戸市在住の神崎氏の系縁の人から、「神崎は決して貴著のなかにあるような女たらしの道楽者ではなかった。家庭人としても厳正だったし、ジョッキ―としては、内外人の称讃をうけて、裏切ったことはない」と、たいへん恨みがましく抗議されて来た。私は早速でいねいに謝り手紙を出してはおいたが、しかし公に釈明すべき機会が今日までなかった。もう戦前のことで神崎氏の遺族すらお忘れだろうが、ここにその事はぼくの作為であり誤りであったことを明らかにしておきたい。

小学一年生のその当時、やがてぼくにとって、忘れない或る一日があった。

何でも、それはカンカン照りの暑い夏の昼だった。例のよくに植木会社の蟬時雨の道を通って家へ帰って来た。誰か、奥へお客が来ているらしく、玄関や庭に打水などしてあって、

家の中は森閑と涼やかだった。

母は、いつものように、ぼくの足やら顔の汗を拭いてくれた。それからやがて茶の間で、新しく入れた茶を女中に奥へ運ばせてから、「あなたもお座敷へ行って、御あいさつしていらっしゃい」と、ぼくへ云った。ぼくは廊下境へ行って、そつと奥の方を窺った。半分捲いた廂の簾の目が、午後の日影を斜めに客間へ落していた。お客は一人だった。いかにも独りぼっちといった感じで、きちんと、広い座敷の中を余して坐っていた。

その人は、若かった。ぼくより十ぐらい年上に見えた。白ガスリの単衣に、小倉縞の袴をはき、少し俯向き加減に、そしてぼくの方へ姿を斜めに見せて端坐している。ぼくの眼にさえ、上品なおとなしい青年の感じがした。

「あの、たれ？」

そつと母へたずねると、母はぼくの肩をそばへ引寄せて、囁いた。

「知らなかった？ 英ちゃんのお兄さんですよ。ほら、小田原にいらっしゃる、あなたのお兄さんのこと、いつか聞いたでしょう」

ぼくは、びっくりした。ぼくに兄と呼ぶ人があった事がどうしても実感にもてなかった。へんなそらぞらしさと羞恥がぼくを固くしてしまい、母から「奥へ行ってお辞儀をしていらっしゃい」と再度云われても、かぶりを振って動かなかった。

まもなく人力車のベルが外で聞えると、ヘルメット帽に白い夏服の父が、その背の高い姿を玄関に見せ、母と何か話し

ているまに、すぐ奥の座敷へかくれた。それきり、しんとした感じだった。すると、ぼくの耳に、奥の方から誰かの泣くような咽び声が聞えてきた。ぼくは、それに異様な衝撃をうけたとみえる。こっそり独りで客間の様子を覗いていた。

父は、兄の手を膝の上に取って握りしめていた。片方の手は、兄の白ガスリの肩へ懸けて、父も泣き、兄も泣いている様子であった。

この光景は、ぼくの眸をつよく烙^やいたとみえ、いつまでも忘れ難いものとなった。そのとき母の姿も、そこに居たのか、茶の間だったかは、よく覚えていない。ズツと後になって、ぼくに理解力が出来たと母から見られるようになると、母はぼつぼつ兄に就てのぼくの疑問を、何くれとなく解いて話してくれた。

兄は、吉川姓でなく、綾部政広といった。ぼくとは母ちがいなのである。ぼくはそれまで、何も知らなかったが、兄は小田原で生れ、小田原十字町の「ふじ本」という料理屋で育てられ、中学もそこで卒業した。横浜にあると聞く父を尋ねて初めて会いに来た時は、十八歳になっていた。

小田原では志望の勉強もできないから、出京して、医科へ入学したい、そして将来は医者になりたいという希望を、その折、父へ訴えたそうである。

兄の医学志願は、兄の戸籍の入っている養子先が、井細^{いさい}田^だ村の医者の家だったので、それを継ぐ意志だったものである。兄は、その綾部家へ、入籍はされていたが、綾部家の当主は死に絶えていた為、藤本林太郎という縁家先の、前述

ふじ本”に養われてきたのである。

どういう理由か、そのさい父は、政広の医学志望には不賛成であつたらしい。そのため、好学の青年は志を得ず、父の意見に負けて、翌日、小田原へ帰って行った。

ぼくの印象にある兄は、女性みたいに優しい感じの青年だった。俗に「痩セ型、中背」というあの通りなタイプで、左の眉の中に大きな黒子があり、頑固な士族あがりの父親とも、このぼくとも、似ている風はどこにもない。

政広は、小田原の花柳界で成人したので、自然、環境からうけた感化が多かったのであろう。後に、ぼくの父母も一驚を喫したそうだが、酒席となると、たいへんな芸能の才で、何をやっても素人ばなれがしていたそうである。けれど平常の兄は、ちつともそんな軽佻の風は言葉の端にも見せず、つましい好青年であり、又、やたらに人好きされた。ついに医学学校には入らなかったが、どこかに薬の匂いがするような医学生に見えた。

母には、腹ちがいの子だが、母はこの兄を後々まで、どれほど、親身になって世話したかしのれない。やかましい父へは常によく庇^{かば}ってやり、ぼく以上にもと、ひがまれた程、可愛がった。また母は、ぼくは子供なので、ひそかに政広を、力としたのであろう。

ところで、次の事だけは、母も、ぼくには決して語っていなかった。それは、兄のほんとの母は、誰だったかという疑問である。

前にぼくは、父が二十歳代の頃、遊蕩の果て、小田原に居られなくなつて、長野県庁へ転勤を命ぜられ、その期間に、

かつて父と小田原で問題を起した美しい留守の内縁の妻が、痴情が原因で男に殺されたという事をちよつと書いた。——で、これはぼくの想像にすぎないのだが、ぼくは、その孤閨^{こけい}にあった美しい婦人こそ、兄の母だったのではないかという気がしてならないのである。

もちろん、その婦人については、父も触れるのを好まなかったろうし、母も子のぼくに聞かせもしない。けれどやや理解力や嗅覚に^た長けて来ると、自然ぼくの疑問にもなっていた。その後、小田原へも母と遊びに行つたし、特に父と兄との、もつれ方だの、父の放つ激語の端などで、だんだん察しられていたのである。そうだとすれば、この義兄は、じつに薄命な人だったというほかはない。やがてぼくを待っていた少青年期の世間的な苦勞に似たような経歴も、この義兄の生まれながらの薄命に比すれば、たいした事はなかった。

家はまた引越した。山手通りの俗に桜並木とよばれる植木会社の表門通りから、遊行坂の降りへかかる坂の降り口で、座敷にいても庭越しに、横浜市街が一望に見えた。

こんどは千歳町の小学校へも、三分ノ一以上近くなった。学校を嫌だと思つたことはない。校舎は木造二階建てで、ぼくらの組は下だった。二階の足踏みもオルガンの音も頭からつつ抜けで、蜂の巣そのままな私立小学校なのである。

校長先生は、山内茂三郎先生といい、九十一歳で、つい昨年亡くなられた。

晩年は、さすが病床に親しまれがちだったが、一昨々年、ぼくが菊池寛賞をもらい、その受賞祝賀会を友人たちが東京

会館で開いてくれたとき、わざわざ横浜から来て下すつた。——その折は、義兄政広の昔の恋人であつた混血美人のオテイちゃんも一しょであつたが——やがて先生が立つて、よろこびの辞を述べられた時、その赤ら顔には老涙をうかべておられた。

山内先生の赤ら顔は、ぼくらが、一、二年生の時からだった。大酒家とは覚えていないが、特に鼻が赤かった。横浜の児童教育史上、この先生の名は逸することのできないものである。幾多、表彰はされているが、教え子のひとりのぼくの胸にも、先生の子供好きな細い眼と、あの笑い顔は、消えうせることはない。

先生は前の奥さんを、お若いうちに失われた。ぼくらは、その奥さんからも教えをうけた。当時では、中流の夫人を奥さんとは呼ばない、御新造^{ごしんぞ}さまと呼ぶのである。ぼくら生徒も「——御新造先生、ごしんぞ先生」と呼んだものだ。わが校長先生夫妻は、勿論、ほかの教員も幾人といたが、夫婦共稼ぎで、教鞭を取っておられたのである。

ぼくらは、どっちかと云うと、御新造先生が教壇に立つことを、もっぱら歓迎した。先生は子供の眼にも美人として映つた。ぼくは自分のお母さんと、どっちが色白だろうかなどと思ひながら先生の襟元や頬の匂いを遠くから嗅いでいた。先生は常に髪を夜会巻にし、袂^{たもと}の長い着物に、紫の袴をはいていた。そのモスリンの匂いすら、ぼくらは感じのこすことはなかった。

ただいつも例外なく、御新造先生が困るらしいのは、ぼくら生徒が、やたらに騒ぐことであつた。ふざけ散らすのは、

意識的であった。目に余ると、紫の袴が教壇を下りて来て——「こっちへ、いらっしやい」と席から立たせ、教壇のわきへ手を引っ張って行って、罰として立たせるのである。ところが、ぼくらの密かな願いは、先生の明眸に睨まれて、そうして貰いたかったのだ。御新造先生の楚々たる歩みと、白い手が、自分の方へ近づいてくると、胸がドキドキしたものである。その手が、他の生徒を引っ張って行くと、ぼくはがッかりしてしまった。

賑やかな町中だし、校庭も広くはない。古い板囲いの壊れ目から覗くと、すぐ隣地の水天宮さまの境内が見える。賽日などは、昼から出ている露店の呼び声や物の匂いがやたらにする。

男女共学などという言葉はなかったが、自然に男女混合だった。もう好きな女の子と、嫌いな女の子があった。好きな女の子と一つ机になった者を、ぼくは羨ましく思うことがよくあった。

雨の日、ぼくらはよく「墨取り」という遊びを机の上でやった。習字は必修科目であったから、硯と墨は、第一の文房具だった。習字の草紙は墨の膠でピカピカに光るほど、その上から上へ、毛筆を重ねて習う。菅原伝授手習鑑の寺小屋の段、あれに近いものと思えば間違いない。

墨のカケラをおいて、交りばんこに、墨で墨を起し競するのである。これは見つかると叱られた。

もひとつ、ぼくらのよくやった雨の日の遊びは、誰の発案だったろうか、雑記帳に、自分の空想するテーマを、映画の

ヒルムのように、一コマ一コマと絵に描きつづけて行き、描きながら、口から出まかせに、テーマを喋っていく遊びがあった。

たとえば、こんな風である——。

柳の木らしいものを描く、川みたいな物を描く。立小便している子供みたいな人物を描く。

「木村がネ、お使いに行っただとサ。そしたらね、小便が出たくなっちゃって、車橋のそばで、川中へ、じゃアじゃア、おシッコしていたんだとさ」

ここで、次の絵を手早に描く。

こんどは、橋を描き、お下げ髪の少女みたいな点景人物。「するとネ、向うから宮崎千代子さんが来たんだよ、ほら、こっちを見たらろ」

さらに、次の絵。

「木村は、まッ赤になっちゃって、小便を半分して、逃げ出したのサ」

こんどは、木村君の家になって、お母さんみたいな人物に、木村君がお尻を打たれている絵。

「家へ帰ったら、お母さんに、なぜおシッコを洩らしたかって、大叱られに叱られたとき」——というような絵とテーマとの、いわば近頃の紙芝居を、即席にやって見せるのだった。

もちろん、絵も説明も、満足には表現できっこないが、子供仲間では通用するのだ。それに、テーマはすべて児童の身辺の事で、またかならず、仲間の誰かをモデルにした。鉛筆と紙のときは、ヒルム式な連鎖描きとし、石盤石筆のばあいには、一場面一場面、描いては消し、描いては消し、かつ思い

つきの筋を喋っていくのだからずいぶん忙しい。

この遊戯は、雨の日の教室に限っていたが、何遊ビとも名称がなかった。あるいは、ぼくらの仲間だけが思いつきでやり出していた事かもしれない。そしていちばんその遊戯を好んでいたのはぼくであつた。みんなから「やれよ、やれよ」と、せがまれるのが自分も得意で、仲間の誰彼をモデルにしては憑かれたように空想を喋り空想を自由画にした。いちど、ぼくが好きな女の子をよくいじめる高木というアバタの少年をモデルにして、そいつが落第したり家が火事になつて小僧にやられたりするような事を、出まかせに喋っていたら、高木が怒つて、ぼくの頭から、硯に残っていた墨汁を浴びせた。振向きながら、手で髪の毛を掻き廻したので、手も顔じゅうも真ッ黒になった。それから何度風呂へ入つても、頭を洗うと湯が黒くなった。

——ところで、今になって思うと、そんなかりそめの遊び事も、一個の未来には、無意味というものはない。空想を遊戯する——という無自覚な方式に依つて、ぼくは何の考えもなく、後年、自分の職業となつた小説作法の極く初歩の手習いを偶然やつていたわけであるかもしれない。

牛乳と英語

最近、母の旧知やら、横浜出身の方たちから、頻りにいろんな手紙をうけた。大仏次郎氏の兄さんの野尻抱影氏も、氏

の小学生時代には今の紙芝居風な雨の日の遊戯を各々の自由画でやった覚えがあるとのことである。また島村収三氏や佐々木美子さんから、モンキの坂や植木会社附近のことについて、前回までの「忘れ残り」をいろいろ補足した御書面をいただいた。

また先頃、直木賞をうけた戸川幸夫氏の会でも、長谷川伸氏との間にすぐ「横浜ばなし」が出た。記憶力のよい長谷川老にただせば、健忘なぼくの忘れ残りもずいぶん補足されそうな気がした事だつた。いちど、それらの横浜先輩に獅子文六氏なども加えて、みんなの忘れ残りを話しあつてみたら、意外な話題も出てくるかもしれないと思つた。

前述、野尻抱影氏からのお手紙の端にも「——小生は英町の生れで、本名は正英、小学校は初め太田小学校でした。おティちゃんとは同窓です」とあつた。おティちゃんについては、後にもっと触れるつもりであるが、彼女と抱影氏とが同窓であつたなどは、意外な初耳だつた。だいぶん下で年代はちがうが、ぶどうの会の山本安英さんなども、この近所にいた一少女だつたことを、これは山本さんに会つたときに聞かされた。

朝日クォーター・ゴルフという会ができた。そして過日、その第一回が相模で催された。賞品授与は、横浜南京町の某亭との事である。ぼくの組はトップに出て、午後二時頃にすんでいた。ほかの仲間はなおハーフ・コースを廻るが、ぼくはその日の小半日を利用して近くの横浜へ先に行く予定をしていた。

山内先生がまだ亡くならぬ前で、先頃から病床と聞いていたので、その見舞を考えていたのである。山手町の横浜女子学院の小さい一室が先生の住居であった。夫人は老先生の看病をしたりその教鞭を取ったりしておられるらしい。先生の事については前号でも書いたが、九十歳にもなると、やはり子供に返るものか、病室で話していると、ぼくの方が校長先生で、先生の方が小学生みたいであった。それにぼくを見るとすぐ老眼から涙を垂れるので、何だかぼくも自分を持ち扱ってしまい、いつも早々辞去してしまうのだった。

南京町の会にはまだ時間が早過ぎていた。——こんな時でもなければと思い、その日、二時間ばかりで横浜中を車で走り巡ってみた。おそらく、あとかたもあるまいと予想された所にさえ、何かしら、ぼくの遠い記憶とむすびつく物が残っていた。わずか三、四十年の間に大震災と戦災にあり、特に米軍の進駐で極端に切りキザまれた横浜だけに、案外な気がして、とても生きてはいまいと思われた古い知己と、行く先々で、ひょっこり、出会ったのと同じような感にうたれた。また、大地の執拗なまでの保守性と時への抵抗にもいささか呆れた。

そしてぼくはさいごに、山手の遊行坂の上へやって来た。——そこに家のあった七歳から九歳頃までの記憶を伴って少し歩いてみた。桜並木の桜は今一本も無くなっていたが、植木会社はまだ面影だけをわずかに保っており、昔の地域の所に横文字のわびしい看板だけは見せている。

また、坂を降りかけて左側の、ちょうど、ぼくが幼時の家のあった辺は、今そっくり小学校の校庭になっていた。

その遊行坂は、今でも、かなりの急坂である。ぼくの八、九歳頃は、もっと道も悪かった。雨の日の通学などには、やたらに^{すべ}にったり転んだりしたものである。鼻緒の切れた足駄の片ッ方を番傘の柄と一しよに持って、ベソを掻き掻き、登り降りした坂道だった。

片側は道に迫った高い崖で、片側だけが麓の遊行寺の門前まで、近頃の分譲地みたいなヒナ壇式の住宅地になっていた。日本人の家といつては、桜並木の角のある小さな雑貨店と、おなじ通りの西にある神崎騎手の邸宅ぐらいなもので、この近所はほとんどが外人の家だった。ぼくらはそれを古風な意味でも何でもなく、日常語として“異人館”とよんでいた。

自然、ぼくらの遊び仲間^いはジョージだのフランクなどという純粹な、紅毛児とも一シヨクタであった。ぼくらに国境感はなく、めったに^い噛み合いはしなかった。けれど、小うるさいからかい方をしたり、小国的な悪戯^{いたずら}をよろこぶ風は、どうもぼくらの方にあったらしい。何かで喧嘩になると、あッちはあッち組、こっちはこっち組、自然、さっと国境ができた。

外人の子を泣かせると、かならずその子の親父がおふくろが、えらいけんまくで異人館の中からぼくらを目がけて^い唖鳴り出して来る。もちろんがなるのも英語である。日本語で怒られるよりも遥かにそれは恐かった。そらッとはかりぼくらは逃げ出す。——しかし、逆にぼくらが彼らに泣かされて帰った場合はどうかというと、ぼくらの母が眼をつり上げて子供喧嘩の干渉に^い唖鳴って行った例などは一ぺんもない、反対にぼくらは親から叱られて家庭の隅で小さくなっているのがオチであった。

この界限では、すこし綺麗な女のひとだと思つと、たいがいが洋妾と呼ばれる婦人か、異人館に雇われているアマさん（家政婦）だった。家からすぐ上の桜並木の端れに、上品な老人夫婦の営んでいる小雜貨店があつて、ぼくはよく買物のお使いに行ったが、時々その店番をしていたきれいな娘も洋妾であつた。そしてその美しい娘のためにああして安樂に暮している老夫婦なのだといったような事まで、誰に教えられなくてもなく知つていた。

らしやめん、という語は子供仲間の会話にもよく使われたように覚えてゐる。しかし当時の横浜世相の中では、差別や蔑視のトゲをふくんだ言葉ではなかつた。ただ日本人同士の間では嗅ぎ馴れないローズやヴァイオレットの強烈な香水の香りと結びつけて或る特殊生活を連想してみるだけのものにすぎない。けれどそれも南京らしやめんと云うと何か違つた意味をもつて聞えた。下級ということがはつきりしていた。白人のらしやめんにも、ぴんからキリまであつたろうが、通いらしやめんにしても、家持ちの洋妾にしても、概して相当にいい生活保証を得ていたらしく思われる。それと、日本に居留していた外人の質その物も良かったせいであろう、関係した日本婦人にたいしては或る程度の責任感をみな持つていたようだ。だから彼らが帰国した後も、生活費だけは幾年も送金してくれてゐるとか、生れた子供には成人までの教育費が保証されてゐるとか云う例は、珍しくも何ともなかつた。従つて、その頃の横浜には、混血児も多かつたが、しかしぼくらの子供心では、そう大して異質を感じなかつた。ただ、らしやめんの子と、云つたりする事はあつた。

らしやめんの贅美な体臭には、敬遠の風を見せる近所の人も、アマさんには、親しみを示して、アマさんの口から異人館の主人の生活振りなどを探ることを、何か秘密めいた興味のような顔して聞くのだった。

そのアマさんは、外出にも白いエプロンを胸に掛け、買物籠を腕に、乳母車など押してゐた。ぼくの母は、アマさん風俗を真似して、ぼくだの、下の妹たちにも、エプロンを造つて胸にかけさせた。泥遊びしても、着物が汚れないでいいという單純な考えからであつたろう。——だからそれを前垂れともエプロンとも云わないで、単にアマサンと称してゐた。

ぼくも小学生になると、もうアマサンは掛けていなくなつたが、それは横浜中の子供に流行つて、いつのまにか日本の児童風俗になつてゐた。——これはずつと後年の事だが、横浜短詩社をやつてゐた弁護士安斎一安氏から「横浜で子供にアマサンを掛けさせた一番初めの人は、あなたのお母さんでしたよ」と聞かされたことがある。何でも、ぼくの母が一安氏を地方裁判所へ訪ねた時、母に手を引かれていた幼いぼくのエプロン姿がふと眼につき、珍しく思つたので、その着想を褒めたことがあるとの事であつた。ぼくには全然記憶にないが、云われてみれば、ぼくはアマサンの元祖であつたかもしれない。

成人したら騎手になりたいと空想したのも、この遊行坂時代だった。名ジョッキーとして人氣の絶頂にあつた神崎騎手の邸宅がすぐ近くにあつた。袖垣にバラをからませた鉄柵の門から内を覗くと、中央に広い草花のガーデンが見え、両側が長い厩舎となつていて、奥に宏壯な洋館があつた。東京の

羽左衛門という千両役者であるとか、新橋の洗髪のお妻とか、ぼん太とかいう名妓であるとか、やれ大臣だとか何だとかいう種類の人々の俤や馬車がよくその門に着いていた。そしてその花形の人、神崎の苦ミ走った容貌と外出の騎馬姿は、お伽話の中の騎士のようにぼくら子供の眼には映じて、ひどく印象的だった。

巖谷小波の「世界お伽噺」を知って、それに読み耽ったのもこの頃からである。ぼくの読書の初めといつていい。博文館の少年世界は、まだ少し難しい感があつた。そこへゆくと、小波の世界お伽噺は菊判四号活字で読み易くもあつたせいか、すでに何十種も出版されていたが、出ている限りの物はあらまし読んだ。

たしか定価は一部七銭だったと思う。家庭では、そうそう七銭の本は買ってくれないのである。牛島坂の上に、格子作りのしもたやがあつて、その小母さんが玄関の上がり三畳に書棚をすえ、その世界お伽噺から、金港堂のお伽文庫だの、日本偉人伝だの、イソップ物語だの、子供向きのものばかりをおいて貸本屋をしていた。

貸本のお伽噺は、すべて一冊一銭だった。だが、馴れて来ると、一銭持って一冊借りにゆき、格子の外から歩き歩き読み初める。そして読み終つてしまうと、途中から又、大急ぎで引返して「小母さん、これはもういつか読んだ本だからほかのと取り換えてくれない？」とべつな本を借りて帰ったりした。

この手をなんべんとなくやっているうちに、ある時、針箱の前から立ちもせず振向いた小母さんから「英ちゃん、こ

れからは、あんたにだけは一銭で二冊ずつ貸して上げるから、いちいち私を二度ずつ立たせないでおくれね」と云われて、顔じゅう熱くなった気持はいまも忘れえない。

そろそろ悪智が芽生え出していたのである。一度こんな事があつた。どういう勢みか、母の眼を偷んで二十銭銀貨を一枚ゴマ化した。そして、その隠し場所に窮したあげく、着物の上ゲの縫目に捻じこんで澄ましていた。ところが裕なで、いつのまにか二十銭玉は、裾の方へ沁り落ちてゆき、歩くとたびに、コツコツ足へ触れるのだった。

どうかして費いたいのだが、費う手段を知らないのである。寝るにも起きるにも、着物が心配でならなかった。そして硬貨が足に触るたび、人知れない苛責にひとりいじけていた。いっそ謝ろうかと何度も思うのだが、日がたつ程、母にも云えなくなっていた。唯、罪の負担と、銀貨の処置に、当惑していた。

ある時、ぼくはその事を、年上の一人の友達にそつと喋った。近所のアブ公という背のヒヨロ長い子だった。アブ公は子供のくせに口のまわりに黒っぽいヒゲが生えていた。眉と眼がくっ附いているような顔だった。よく腰巻一つで波止場を裸足で歩いているアラビア人と似ていた。やはり混血だったのだろうが、どんな家庭の、どんな職業の人の子だったかは、覚えていない。

とにかく、アブ公に、秘密を打明けたのは確かである。すると彼は、ぼくの着物の裾をめくり上げて、裾の縫目を歯で噛み切った。そして角にギザギザのある二十銭銀貨を手品のように揉み出した。彼はそれを握ったまま、ぼくの手には渡

さなかった。ぼくも又、自分で持つ勇氣はなかった。アブ公は突然、こう叫んだ。

「伊勢佐木町へ行こうや、伊勢佐木町へ連れてッてやる」

ぼくは唯々として彼について歩いた。

しかとした記憶は今、思い出しきれないが、その頃の二十銭を消費することが、二人の児童の買食いでは、いかに骨が折れた事かは、腹にこたえて覚えていて。

まず汁粉屋へ入った。およそハガキ大の餅が入っていて、たしか一銭か一銭五厘だった。南京豆やアンパンをふところに、賑座の立見を見た。出てからまた、犬コロのように買食いして歩いた。しかし二十銭はどうしても費い切れなかったものとみえる。まだ二銭銅貨を一枚あましていた。

アブ公とは、どこで別れたのか、日の暮れ方、ぼくは狸みたいな腹をかかえて、車橋の上を帰ってきた。ぼくの手には二銭銅貨が残っていた。銀貨よりも遥かに大きな二銭銅貨を持つてしまつて、ぼくは途方に暮れた感じだった。もちろん、持つて帰る勇氣はない。

ぼくは石でも抛^{ほう}るような振りをしながら、往來の隙をみて、その大きな銅貨を、車橋の上から河へ投げ捨てた。そして逃げるように、わが家へ駆けて帰った。その後は、覚えていない。だが、日頃の石投げの手なみで、銅貨を河へ投げたときの快感だけが、今でもかすかに手に残っている。

その後、ぼくはアブ公と遊ばなかった。道ではよく会うが、向うでも澄ましていた。買食い事件だけでなく、もう一つ子供同士でも、へんてこな後味を持った事があつた。

ぼくの家のすぐ庭先から、眼の下の低地には三、四軒の屋根が覗き下ろされる。日曜の朝になると、その一番奥の屋根の下から、讚美歌のオルガンが愉^{たの}しげに聞え出し、近所の子がみな集まつた。

帰りには、美しいカードをくれたり、その主人と奥さんが、面白い話をしてくれたりする。ぼくも日曜日の朝になると、大勢の子等と一しよに、畳の上で讚美歌を合唱した。アブ公とはそこで友達になつたのである。

家は、ふつうの借家で、八畳と四畳半ぐらゐな部屋の襖^{ふすま}を外し、オルガンだけが、日曜学校と云えば云える風景だった。その主人夫妻は、元よりクリスチャンだろうが、べつに宣教師ではなかつたようだ。ただ子供集めが好きで日曜行事としていたのであろう。横浜にはそんな家庭がいくらかあつたものである。そしてここには、お下げ髪^{くすく}の美しい娘がいた。ぼくよりも年上だが、ぼくはその少女が好きであつた。讚美歌の合唱の時、少女の唇元^{くちもと}を見ながら共に歌っていると何ともいえない愉しさにくるまれた。

家は近いので、日曜でない日でも、ぼくは彼女に近づくことが出来た。ところが、ある日の午後、彼女を誘うため、その家の裏庭の縁側から、少女の名を呼びかけた。家の中には、誰も見えない。留守なのか、と帰りがけた。すると奥で櫛^{くすく}られたようにクツクツ笑う声があるので、もう一度戻ってみると、オルガンの蔭で、少女とアブ公が、絡^{から}み合つて寝ていた。少女は顔を埋めていたが、お下げ髪の頭越しにアブ公の顔がこつちを見た。

ぼくは奇妙な気もちに行き迷^はぐれて帰った。シヨックとい

うほど強い嫉妬でもなかったし、少女とアブ公の戯れも、大人の行為のそれとは違うものであったろう。けれど当座は、堪らない少年の孤愁にとらわれ、それから、アブ公とも口をきかなくなり、日曜日の讚美歌も歌いに行かなくなってしまった。

母は、ぼくを、よく口ぐせに「医者にしたい」と云っていた。父は「ばかをいえ、これから貿易だ、事業家にする」と云っていた。母の考え方は、母が娘時代を近藤塾で過していた影響であつたろうし、父は自分のやっている輸出入業や棧橋会社の事業が好調のさかりだったので「わが子も、将来は横浜で」という考えだつたにちがいない。

ぼくは八ツの尋常二年頃から、学課が終つても、毎日、ただ一人だけ、二時間ずつ、学校に残された。そして、一人の英語教師から、英語の単独教授をうけた。

これからは貿易だ、英語だ、という考えと子供への方針から、父が特に山内先生に依頼して、ぼくに早くから外語を身につけさせようとしたものだった。

もひとつの理由は、ぼくの素質と素行を見て、親の眼から「これはいかん」と、何か父の頭に、教育方針の一変を思わせるものがあつたのかもわからない。

何しろ、ぼくは遊べなくなっていた。この頃から急に、父のあり方が、前にもまして厳格な存在に映ってきた。父は、かつて自分が受けた通りな子弟教育の範を、封建そのものの薰陶を、子のぼくへ、課し初めて来たのである。

毎日の学科がすむのは、午後二時か三時頃である。もう級

友はみな帰ってしまい、ガランとした教室の中には、ぼくと英語の先生だけが残っている。ナショナルのリーダーの一言前に“*It's a dog*” だの “*It is a hat*” などを繰返しているうちに窓外は薄暗くなつてゆき、帰りたさ、遊びたさに、堪らなくなってくる。

自分も知らないうちに、リーダーの上へ、涙をぼろぼろこぼしたりした。これを半年ほどやってゆくうちに又、九歳の一月からは、もう一つ夜学の励みが加えられた。

夕方、家に帰ると、すぐ晩飯を食べてから、今度は、前に書いた少女の家のスジ向いに住んでいる漢学の先生の所へ、毎夜夜学に通うのだった。

この先生は、お母さんらしい老婆と学生の弟さんと三人暮らして、奥さんはなかったようだ。水戸の人で、岡鴻東と覚えていた。まだ三十がらみの小づくりで温容な人だった。いつも黒木綿の紋附の羽織を着、袴をはき、ぼくのお辞儀に対してさえ、礼儀正す風だった。桑の木が何かの小机において、先生と向いあうのである。

いちばん最初に先生から示された教科書は、“中学漢林”で、外史や十八史略の抜抄であつた。それで多少興味づけられてから論語や小学の素読へ移った。和書のページの難解な辞句の所には、朱唐紙しゅとうしを小さくちぎり、ちよつと舐めて、疑問の印に、辞句の部分へ貼りつけておいたりする。あの和書の中へ点々と貼った紅梅みたいな朱唐紙の色だけには、子供心にも優雅なものを感じたりした。

だが、いくら家の近所にしろ夜学が終つて帰ると、もう八時か九時近かつた。その頃、父も会社から帰っている。そし

て時にはまた、父の前で、英語と漢学の復習をさせられた。わずかな時間だったろうが、これが何より辛くて、いちばん長い時間に思われた。冬の夜などは、室内の暖かさに、どう気をひきしめても、つい居眠りが出てしまう。

そんな時、父から一喝を喰うのは、のべつだった、ある夜の如きは、いきなり父が立上がつて、縁側の障子を明けたと思うと、ぼくは外の庭へ突き飛ばされていたことがある。忘れもしない、その晩は雪が降っていた。母の姿が廊下に見える。「ぼかつ、誰がゆるした。上げてはいけない。雨戸を閉めてしまえ」と、障子の内でなお父の云うのが聞えた。

ぼくは、わんわん泣き喚きながら二、三十分間も外から障子の内へ謝った。その辺、夢中だったので、よく覚えていないが、やがて、裸足で台所口の方へ廻つてゆき、氷のような足を母の手で拭いてもらった。そして、母と一しょに泣きじやくりながら、もう一ぺん父の前に坐らせられた。

父がぼくに課したことは、もちろん父の愛情と信じてしていたことであろう。なし易い小愛を超えた父性の大愛とも考えていたにちがいない。今の父親や教育者には理解しがたいものだろうし、現在のぼく自身にも、到底できない。

けれど間違いなく、こういう父性と家庭環境につちか培われたぼくではある。だから現在のぼくの子供らから、ぼくを見れば、ぼくという父にも多少どこかに祖父的な煙たさがあるかもしれない。ぼく自身は充分、今日という時代反省を経ているつもりではいても、どこかに何かは遺伝しているだろう。しかし、今日の親たちがわが子への、余りな放任ぶりや甘やか

しにまかせている風潮にも、いささか疑いがないではない。時には、かつてのきびしい父性に郷愁を感じることが正直否みなく、ぼくにはある。

暴風雨の日曜日だった。

日曜日ではあったが、父はなにかのため、その朝も会社に出かけた。当時は、お弁当の配達屋さんというのがあって、毎朝、箱車を曳いて勤め人の家々から、お昼の弁当箱を集めて歩く。そして正午までに、それぞれの主人の出勤先へ弁当を配達してくれるのだった。

その配達屋も日曜日は休みである。ところが、父はその朝出がけに「英と、きの（妹）に弁当を届けさせろ」と母へいつけて出たらしい。ぼくは、ぼくより二ツ年下のきのと一しょに一本の番傘を斜めに持ちあい、大あらしの中を二人とも裸足で、海岸通りの栈橋会社まで、父のお弁当を届けに行った。——その時は父も上機嫌で、会社の小使部屋で、兄妹に一品洋食を取ってくれたり褒めたりしてくれた。そんな時は、父の姿が又なく温かな大きな父に見えた。

ぼくは子供の頃から、何が嫌いといって、牛乳ほど嫌いなものはない。何でも四ツ五ツ頃、大病を患つて、ムリヤリに牛乳を飲ませられたことが原因らしいのである。

その嫌いは、この年になってもまだ直らない。家族が牛乳を飲むのに使ったコップは、いくら洗つてあつても、口のそばへ持つてくると「——牛乳を飲んだね、このコップで」と、すぐ分つてしまうのである。バタ、チーズは何でもないので、牛乳と聞けば胃が拒んでしまうのだ。

それと、も一つのニガ手は、英語である。英語は必修課目

として、父があんなにまでして、ぼくの幼少頃から身につけさせようと計っていたものなのに、父の意図は、子のぼくにとっては、全く、ぼくの胃と牛乳の関係みたいなものになっ
てしまった。日も暮れかかるガランとした学校の教室にただ一人残されて、ナショナル・リーダーへ、ぽとんぽとん涙をこぼした童心の牢獄感が、いつかしら胃が牛乳をつきあげるのに似た特異質をぼくの中に育成していたのであった。その後、年を経てからは、語学の欠如に自分でも気がつきもし、また大いに後悔もして、ある期間は、文学書の耽読をやめて、その勉強に専念したこともあるが、語学ばかりは、頭に入らないのみか、てんで体が拒んで根気もつづかないのだった。今でもなお牛乳と英語にたいするぼくの生理には変化がない。

春の豆汽車

まもなくぼくの家はまた、横浜市の西郊にあたる南太田へ移ったので、ぼくの遊行坂時代は二年か二年半ぐらいの期間でしかなく、自然、小学校も変ってゆき、山内先生や御新造先生ともお別れしたのであるが、遊行坂時代の記憶で、なお思ひ出にある幾つかを順序として書いておくことにする。

ぼくは幼少時にその頃の東京を二度見、その頃の汽車に二度乗った。いちどはまだ小学以前か一年生頃であった。母に連れられて母の郷里の佐倉へ行ったのである。おそらく母に

とってもそれは結婚後ただ一度か二度の嬉しい帰郷であったかと思われる。

今では日帰り距離にすぎないが、当時は横浜から千葉県佐倉への旅行というと、ひどく億劫おっくうがッていたものらしい。もつとも汽車が桜木町駅を離れると、京浜間は、鉄道唱歌そのままな緑の田園風景が新橋駅までつづき、車窓の顔はみな長閑な眠気と旅行感にウトウト誘われたものである。

その時の旅行では、母と共に東京の親戚の家に一泊した。母の実姉が嫁いでいた先である。北白川宮の邸内に住居があった。

泊った翌朝、宮家の事務官と伯父のあとにくつついて、邸内のあちこちを見あるいた記憶がある。若宮様のお部屋と聞かされた所にニッケル色のレールが大きな円形を描いていて、それに精巧な玩具のアルコール機関車が乗っていたのを、誰かがその汽車を走らせてぼくに見せてくれた。

終戦後はよく、大人までが面白がって、貨車、機関車、停車場、レールなどの部分品を買い集めては組み立てたあの舶来玩具なのだが、その頃としては、宮家でもなければ無かったものだろう。幼時の記憶で何かといって、この豆汽車が走ったのを見た時くらいびっくりしたことはない。

母の義兄の斎藤恒太郎は、語学者としては、明治の三斎藤といわれた一人だそうで、学習院教授をしていた傍ら、宮家の教育掛りをも勤めていた関係上、北白川宮の邸内に居住していた。

その斎藤家へ嫁いだ母の姉は、豊子といった。豊子は三人

の子を遺して二、三年前にもう亡くなっていたのであるが、
ぼくの母は、その姉の愛情によほど忘れえないものを抱いて
いたらしい。

ぼくなど全然その伯母を見ていないのだが、面ざしや輪郭
まで、まざまざと会った人のような錯覚を今でも^{まぶた}瞼にもって
いる。それは母が老年にいたるまで、そして、貧苦のどん底
にあった頃でも、姉の豐子の写真だけは、お守りのように大
事に持っていて、子供のぼくらへその姉の優しさや美しい情
操を何かにつけて話して聞かせたせいであろう。そしてまた
母は、義兄の齋藤恒太郎をも心から尊敬していた。姉亡き後
も音信をつづけ、ただ一人の親身な人と頼っていたふうであ
った。

ただ不幸なことには、ぼくの父と齋藤とは、肌が合わず、
生涯、犬猿もただならぬといっている仲であった。そのため
母が泣いた例をぼくらは何度も見聞きした。何が原因か、往
々、理解に苦しんだものだが、ぼく自身が成長して、複雑な
人間心理やら家族制度のもつ^{かも}因習の醸すところなども多少分
るようになってからは、その不審もやや解けてきた。要する
に、負けん氣のつよい、そして親戚間にさえ対抗意識をもつ
父が、逆境に依る偏狭のなせるわざだった。父と齋藤とは、
その性格から生活環境すべてが、まったく相反^{はんげん}するものを
持っていたのだ。

だが日頃、母が慕う親身の人と覚えていたぼくは、後に、
苦学の志望をもって出京した時、その齋藤家の玄関を一ばん
先に頼って行ったものだった。それやこれやもあるので、こ
の伯父のことはもっと知っておきたいと考えていたが、もう

旧事を知っている人も周囲にいないので、文芸春秋誌上で母
の生い立ちにちょっと触れたさい、姉の嫁ぎ先の人として、
唯その氏名を引合いに出しておいたに過ぎなかった。

ところが、つい最近、文春の一読者として、思いがけない
人からお手紙をもらった。それに依って、さきに書いた近藤
真琴の攻玉舎の事だとか、母と齋藤との関係なども、ぼくの
忘れ残り程度でなく、かなり具体的に分ったのであった。じ
つはお手紙をくれた方には無断なのであるが、さして御迷惑
にもなるまいかと思つて、文面の一部をそのまま次に引用
させていただいた。

——（前文略）——

文芸春秋の“忘れ残りの記”をおなつかしく拝読いた
しました。実は私の母は近藤真琴の次女でございまして、
たまたま貴方様の記を読み聞かせましたところ、貴方様
の御母堂とは従姉妹同士のよしで、貴方様がその従姉妹
の御子息にあたるのかと云つてまことに驚いておりまし
た。

近藤の家でもみな故人となつて、孫達は大勢いますが、
昔の事など知っているのは母一人になりました。母は数
え年八十になりますが、今のうちおたずね下されば聞き
とつて何なりとお知らせいたします。

念のため、私の母と御母堂との関係やら近藤家のこと
を略記いたしますと、次のようになります。

近藤真琴の妻^{まき}真樹（前名^{ゆきこ}幸子）が御母堂の母上の御姉妹
です。佐倉藩の吉益という家から出ております。（中略）

——貴方様の御母堂は、私の母が芝新錢座の近藤塾（攻玉舎）の娘でいた少女の頃、よく存じあげており、仲よく遊んだものだとして申しております。その頃、御母堂には斎藤恒太郎氏（攻玉舎の英語教官）のお宅に姉上と御一しよに居られました。

ついで乍ら申しますと、私の母は後に鈴木金一（日本郵船機関長）という者に嫁し、母の長兄近藤基樹は海軍中将（男爵）で昭和四年に物故いたしました。また姉の婉子は海軍造船中将（男爵）山内万寿治に嫁して昭和十七年に亡くなり、次兄輔宗は外国商館に勤めておりましたが、これも昭和三年に亡くなっております。

私の主人河内信弥太は、現在、北海道銀行東京事務所長をしており、事務所は麻布本村町八三でございます。何ぞまたお問合せのことでもございましたら主人まで御連絡くださいませ。（後略）——

河内喜代子

前掲、河内夫人からのお手紙をうけてから、ぼくは母の少女像を一そう濃く描くことが出来、また、母が少女時代からすでに郷里を離れていた事情だの、斎藤家との浅からぬ由来などもよく分って来たのであるが、同時に、これまでの中で訂正しなければならぬ部分も生じて来た。

というのは、ぼくの両親の媒人は、横浜在住の吉益という吉益東洞派の漢方医とさきに書いたが、やはり佐倉の人で、ぼくの母の母方の生家でもあったのだ。そうと分れば、近藤

家と密接なのは当然だし、その吉益の口ききでぼくの母が横浜へ嫁いだわけも頷かれる。だが、肝腎なこの吉益その人については、それ以外には何もぼくには知る所がない。——どうもこうしてみると、ぼくの“忘れ残り”の量よりも世間の誰かが何処かで持っている“忘れ残り”の方がよほど多く、また話も具体的なのでもある。何とも忸怩たらざるをえない。

ついでに、なおもう一つ書き添えたいことがある。前述の河内夫人のお手紙に見える河内信弥太氏が、後日わざわざ、私の宅をお訪ね下すった事である。それで私のえがいていた母方の縁べきやら生家の模様も一そうはつきりしたし、かつまた、そのさい河内氏から聞いて意外に思ったこともある。一昨年頃、重要無形文化財に指定された人形作家の堀柳女さんの実家と、私の母方の生家とは、おなじ佐倉藩であるばかりでなく親戚関係でもあったという。私はそれ以前に、文春から出版された柳女さんの著書“人形に心あり”なども読んでいたが、ゆめにもそんな点は気づかずだった。けれど河内氏からそう聞いて、さっそく、もいちどその書を繙いてみると、なるほど柳女さんの実家の姓として柿内と書いてある。思い出すと、柿内という姓を私も幼少に母の口からよく聞いていた。これなどは“忘れ残り”を書いた為に教えられた一つである。まことに、どこに有縁の人があるやら、この人生はわからない。

つい横道へそれたが、とにかく東京（明治三十年前後の）と

いう大都会にちよつとでも触れたのは、母と一しよに佐倉へ行った途中の青山一泊が、ぼくには最初のものであった。

そして斎藤家を辞した翌朝である。忘れもしない、青山から本所の両国停車場までの長丁場を、ぼくと母とは人力車にゆられて行った。何度も途中で俵が止まり、ぼくは母から呼び起された。すぐ居眠ってしまうのだった。季節は晩春だったような気がする。途中、人形町で俵を休め、土産物を買ったり、梅園のお汁粉を食べたりした。

——佐倉のおじいさんは、ぼくら孫たちが、身のうちに持ちあっていた温かな愛像だった。その頃まだ、頗る健在で、郷里の町長をやめ、隠居身分でいたらしいが、昔ながらの高い生垣を繞らした屋敷の中に住んでいた。庭先からすぐ真下に印旛沼が一望に見えた。おじいさんは朝の膳にも酒を欠かした事がなく、銚子の浜から夜どおしで担いで来るという魚屋をつかまえては陽気な冗談をとばしていた。鰹の刺身を皮ツキに作らせ、にんにくオロシの醤油で食べるのが好きであった。そして、酒のしずくが気になるのか、真っ白なアゴ鬚をのべつ手のひらで横に撫でる。どうかすると、ぼくを抱いてその白鬚をこすりつける。にんにくの臭気を嫌ってぼくはよくおじいさんの桃色の顔を邪けん両手で押しのけた。

この折の旅行の帰途で、忘れ難い出来事が、も一つある。以前の新橋駅（汐留）であった。母は大きな信玄袋や何かをぼくの足もとにおいて、「このお荷物を見てるんですよ。いいかい、お母さんはあっちで、切符を買って来るからね」と、駅内の大きな柱の下にぼくと荷物をのこし、やがて人混みに見えなくなった。

まもなく、母は切符を買ってもどって来た。だがどうしたのか、ぼくは知らない。ぼくの足元の大きな信玄袋は消えて失くなっていった。母は眼のいろ変えた。やがて巡査や駅員がやって来た。大勢の旅客が輪になってぼくらを取巻いた。ぼくは何か責任を感じたものらしい。手放して泣き出した。よほど大声で泣いたにちがいない。誰かにあやされながら、汽車に乗せられたが、汽車の中まで、泣き止まなかった。

その事は、ぼくが大きくなってからも度々母の一つ話に聞かされた。しかし、スリか何かに盗られた大きな信玄袋——合財袋ともいった——その中には、母の衣類化粧道具のほかは、印旛沼名物の鰻の白焼キしか這入っていなかった。近所隣りへのお土産にと、その折詰ばかりが一ぱい入れてあっただけだから、スリも後ではそんな沢山な鰻の白焼キを始末に困ったろうと、母はよく笑いばなしにした。

蒲焼には毎度お目にかかるが、近ごろ、鰻の白焼キは、お客の方でもあの特有な味を忘れていってしまうらしい。どうかして宮川とか熱海の重箱などでこれに出会うと、ぼくは人知れず、遠い以前の新橋駅をすぐ思い出すのである。

二度目に、東京を見たのは、小学三年生の時の春だった。上野に“全国児童選書展覧会”というのが開催され、ぼくのお清書も入選して展示された事かもしれない。山内先生以下、数名の生徒や父兄附添いで、横浜からわざわざそれを見に行った。

一行十名足らずで、校長先生の引率といっても、頗る行楽気分な家族づれだった。ぼくには母も誰も附いていなかったが、女生徒には父兄が一しよだった。その中に、加藤何子と

いう同級の女生徒がいた。日頃からその子も嫌いでなかったけれど、宮崎千代子という子の方が、もっと好きで、もっと綺麗に思われていた。その二人とも同じ旅行の中にいた。だからよほどこの修学（？）旅行はぼくにはうれしいものだったに相違ない。

けれど、その二少女を対象としての幼い恋とか感傷などは、何一つ後々には残っていない。上野から浅草へ廻って、宇治ノ里の小座敷に行儀よく並ばせられて、お昼飯を食べたぐらいなものである。ところが、へんな記憶がつよく印象づけられていた。附添いの中にいた加藤さんのお母さんに、鉄道馬車の中で膝に抱かれた事なのである。

あの時代の浅草、両国、京橋、銀座——を、トコトコと馬糞だらけにして走っていた鉄道馬車なる文明の乗物を、今でも鮮やかに眼に描くことができるのは、加藤さんのお母さんのおかげかもしれない。その婦人はもちろん三十をすぎているに違いないが、何か、少年の眼にも優れた美人型に見えたのである。単に美人であるばかりでなく、横浜風の盛装か、髪も指も帯留も宝石に燦めき、そっと動いても周りの者へ体温のある香料の匂いがぷんと揺れてくる藤の花みたいな印象をいまでも覚えている。

人力車でゆく青山から両国駅までの間も、寝飽きるくらい長かったが、浅草から銀座、新橋間の鉄道馬車もずいぶん乗りであつたように思う。きつと途中で乗客が混み合つてきた為であろう。加藤さんのお母さんが、だまつてぼくの体を膝に乗せた。ぼくは体をむずむずさせ、少し拒むような素振りをしたと思う。すると加藤さんのお母さんは、なお深々と

ぼくを抱きかかえ、ぼくの顔へ頬をよせて窓外の京橋や銀座を説明してくれたり、やがてぼくが凝としてしまうと、その人も凝と鉄道馬車の揺れるがまま居眠つてでもいるように澄ましていた。

ぼくは自分の偽れない羞恥を人前に曝している感じだった。しかしひそかに恐いほどな幸福感にもはちきれていたのだろう。いやそういう抽象的な語ではその折の少年心理を率直に云っているとはどうもいえない。もっと直接的な肉感自体の動揺の方がはるかに大きい。西鶴の世之介ほどでは勿論ないが、おぼろな空想の甘味を偷みながら、ひそかに自身の中の或る芽生えを驚異するのにちょうど適度な体温と甘い匂いに酔つたのは確かである。

いま、指で年齢を繰つてみても、それがぼくの十歳の春であつたには相違ないことは、ぼくが特に早熟であつたのだろうか。それとも十歳といえbaumう共通な男の子一般の性現象と見ていいのだろうか。——とすれば案外、自分が親になつて来た年代になると、われわれ親たちは子どもらの性について、ちつとも真剣に考えていないという気もしてくる。なぜなら、自分の幼時の体験や現象には、とかく眼をふさいで子を見る風があるからである。どうもこの方が共通な親たちの現象であるといえるかもしれない。

父はやたらに世話ずきな人だった。もっとも、自己の順調なときには誰にせよ寛容のあるものだが、ぼくの父もよく人のすったもんだを背負い込んで奔走して廻つたり、自宅に大勢の客をして悶着事の口をきいたりしていた。人に立てられるとか、人の美言などが好きだった方なのであろう。そし

て自己の善意が裏切られた恰好になると又その不きげんの度もひどかった。母にまで飛ばッちりを浴びせて唸鳴るといった風である。

性懲もなく、いちどなどは、波止場のマドロスの中から国籍も素姓も分らない弱々しい外国人を拾って来たりした。まだ若い異人なのだが何か病氣をもっているらしいのである。マドロスといっても、およそ汚いマドロスだった。風呂に入れたり下着や父の古洋服を着せてやるのに、家じゅうに虱が散らかるといけないといって、母から女中まで悲鳴をあげたものである。父は、その若い異人をやがて会社にも使うつもりでいたのか、医者にかけたり、日本語を習わせたり、その健康になるのを見て独り満足していた。

ぼくらは自分らの家庭に一人の異国人が加わった事に異常な興味と物珍しさを覚えた。可愛がったというよりもオモチャにして飲んだわけかもしれない。マドロス氏の方は、人に馴れない小動物みたいに常におどおどした眼と、作り笑いばかり見せていた。それでもこのマドロス氏は、半年ぐらいぼくらの家にいて、お風呂の水汲みをしたり不器用な手つきで庭を掃いたりしていた。ところが、ある朝、姿が見えなくなってしまう。父の部屋で、母が嘆いている声がしていた。

「……だから私が、云わない事じゃないんですのに」

この朝、会社へ出てゆくときの父の、何ともまずい淋しげな顔つきといったらなかった。

家族以外な食客も常に何人か居た。これは食客とはいえないが、母の実兄で、横浜灯台局の技師として赴任してきた山上清という、ぼくには伯父にあたる人も同居し、まもなくそ

の弟の土木技師の三郎という叔父も来、その上、ぼくの小田原の義兄政広も横浜の左右田銀行へ勤めるようになって、共に住むというような大家内になっていた。

とても、家が狭いというので、遊行坂の道路に面したすぐ近くの借家をべつに借りうけ、食客や伯父たちはみなそっちに雑居し、朝晩の食事はこっちから女中が運ぶという形をとっていた。

その連中も、父の姿はひどく怖れ憚ッていたが、父の帰宅のおそい夜などは、その洋灯の下に牛鍋や酒が展開され、何をやっているのかと思うような騒ぎ方が始まっていた。そして女中までがそっちへ行くとキャツキャツと笑いこけていて呼んでもなかなか帰って来ないといったような暮し振りを見せていた。

そのうちに、伯父の山上清が、ある晩、発作的に精神病的な兆を見せ始めたのである。みんなの枕を並べている寢床に立って、突然、放尿したのであった。これは大騒ぎだったが、だが入院させて落着くと、日ならずして平常状態に返った。そして勤務先の灯台局へも勤め出したが、役所先でも、変だ——と云われ出したらしい。まもなく辞職して、しばらくは遊行坂の家で静養していた。が、その後も発作を起すと時々乱暴し出すので、ついに附添人をつけて一時郷里へ帰すことになった。佐倉へ帰ってからは、だんだん発作の回数も減ったらしく、後には健康を恢復して、麻布の竜土町に新家庭をもち、この伯父の方はまずサラリーマンなみの単調無事な生涯を終わったのであるが、しかし、どういうものか続いて次の三郎叔父が、おなじような精神病になってしまった。そして、

これも一時は快方に向い、渋谷の松濤園^{しょうとう}が住宅地となる頃まで、鍋島家の土木技師として雇用されていたが、その後、病気が再発して、ついに若死してしまった。

ほかの者には、誰にもそんな兆候は見ないのだが、まちがいに、ぼくの母系からは、その伯父と叔父の二人までが、真正正銘の精神病にかかっている。もし精神病が遺伝的なものならば、係累のどこからか、いつ忽然と、第三の実証を示す者が立ち現われなくても限らない。

どうかした時、ぼくはぼく自身の血液のなかにも、何かが潜んでいやしいかというような恐怖^{おそ}の翳^{かげ}に、ふと取り憑かれていないかと思っているが、考えてみると、少青年期のある時期には、ぼくも多分にそれらしき発作のひらめきをやったものかも知れなかった。

家が、南太田の赤門前へ引っ越したのは、ぼくが九歳の秋頃である。南太田尋常高等小学校へ転校した。こんどの学校は、家からも近く、駈け足でゆけば二分か三分だった。赤門前というのはその辺の俗称で、正しくは、横浜市南太田清水町一番地と書いた。

いとも閑静な、そして小さな町で、清水町は一番地から四番地までしかないのである。戸数も何軒と数えられるようなその真四角な住宅地の周りを、西北の戸部山や久保山から流れてくるきれいな小川が繞^かっていて、どの家の門にも、その家だけの小さな橋が架かっていた。

ぼくの家は、赤門とよぶ寺の山門通りに面した角地であっ

た。だから家の横にも前にも、その清冽^{せいれつ}な水が繞^かっていた。この辺には、異人館も皆無だったし、混血児の友だちもいないし、以前の山手環境^{やまのて}とは、まったく空気がちがっていた。山本安英さんの生家もこの清水町だった。

家の前は広い三叉路で、北へいくと、鉄温泉とよぶ鉱泉宿があった。南には、すぐ南太田小学校の校舎が望まれ、普門院というお寺やら、英町^{はなびさ}、霞町などという静かな町並の生垣がつづき、もすこし行くと初音町に出る。そこまで出ると、かなり賑やかで、角に大きな乾物問屋^{かんぶつ}があった。その息子が、その頃漸く擡頭^{たいとう}し出した壮士芝居というものの役者になって、森三之助という花形役者だということを、誰からともなく聞かされていた。

それと、もひとりその頃の著名人として伊藤痴遊^{ちゆう}の家が、ぼくの家から広い三叉路をへだてた向い側にあった。ぼくらが兵隊山とよんでいた山の崖をうしろに見越しの松に船板塀^{せんべい}といった構えの住居であった。事実、妾宅であったのかもわからない。

或る朝、学校カバンを肩にかけて、家を出てゆくと、近くの駕虎^{かことら}（人力車宿）の若い衆やら近所の人たちが往来に出て、何やら事ありげに噂をしていた。その立ち話によると、その妾宅へ、明け方、誰かが寝込みを襲ったらしく、伊藤痴遊が寝衣姿のまま裸足で逃げたのを見た、その騒ぎを、蒸し返し、みんなでしているのであった。

痴遊は、その頃、雲井町の雲井座という小屋を持っていて、ぼくら子供心にも、壮士という名で通っていた。壮士とは何の意味であるか分らなかったが、ただ恐い者だという観念が

あった。——後年、痴遊の政治講談をどこかで聞いたことがあるが、近所にいた頃は、顔も見たことはなかった。痴情騒ぎなど近所に聞えたので、やがてすぐ他へ移って行ったものかもしれない。そういう些細な事すらも、すぐ近所への不体裁とか面子を憚られるほど、清潔というのか、社会秩序があったというのか、とにかく静かで、ひっそり閑とした世間であつた。

みどり屋雜貨店

元来、ぼくの父は大酒家だつた。ことに一頃の父の姿は酒狂の人みたいになく、子供たちの眼には灼きつけられたまま残っている。そうした父の大酒振りも、こころで述べておいた方が話の順序にも役立つので、見得もあらもつつまずそんな事も少々書いておこうと思う。

幾歳になつても、親を語るばあいの自分はやはり子供なので、親の追憶像を人なかへ示すだんになると、子としてつい親びいきみたいな心理が手つたてくる。何も偽ってまでよく書こうなどとは決して思わないが、余りに非常識な点だの人間的な短所などは、わが親の像として、何だか彫み出し難い気もちが先立つてくるのである。

だがこんな観念は、近來の十代二十代で早くも親を批判の的とするに馴れている新時代の子たちには、およそ愚にして

気の知れないものかもしれない。しかし、ぼくらの内にある古めかしい骨肉感も決して親の威圧で植えこまれた残痕ではなく、否定できない肉体上の、分身の責任感から来るものである。つまり父の酒狂像も人間的短所も、ぼくら数人の子へ、まちがいなく多少ずつ遺伝分配されていたにちがひなく、父が現世でやった影踊りは、自分の影でもあるような羞恥を覚えるからだつた。

日本間なのだが、二階の父の寢室には、大きな西洋ダンスがおいてあつた。あらゆる種類の舶来酒がその棚に並んでいる。

父は、寝しなに限らず、枕元にもそれらのビンを並べさせて眠つた。ぼくは真夜中によく眼をさました。そして、父の部屋でする微かな物音に耳をすましたものである。それは猫が舌ツヅミでも打つような怪しさに聞えた。ふと、深夜に眼をさました父が、寢床の中で腹這いのままジンやブランデーなどを独りでカクテルしては飲んでいたのであつた。二度でも三度でも、眼が醒めさえすれば飲む。それが父の習性だつた。

一升酒というが、父のは底が知れないと、母はよくなげいていた。朝の出勤前から父の姿には酒の香がぶんぶんしていた。

自転車はまだ横浜でさえ珍しい物の一つだつた。父はその自転車で通勤もし、よく乗り廻っていたらしいが、自転車の上でもポケットからウイスキーを出して飲み飲み走っていたという噂などを母に告げる人もあつた。そのくせ泥酔自転車

で往來の雛妓を刎ね飛ばして入院騒ぎを背負ったり、八百屋や豆腐屋の店へとびこんで賠償を取られたり、のべつ手や顔に擦過傷をこしらえていた。

棧橋に繋留中の外国船内で、外人の船長、事務長などを相手に一昼夜飲みつけ、あげくにそれらの外人数名をつれて、大森のあけぼの、新橋の花月と飲みあるき、その間、飯らしい物は口にせず、幾日目かに横浜へ帰って来た。そしてその船の出帆を見送るとすぐ棧橋で血を吐いて仆れた。というような愚にもつかない事を、父は自慢らしく、いや、性懲りもなく、酒を飲みながら家庭でもよく云うのだった。

吐血は、それ以前にも何回か見ていたらしい。思うに、もうその頃、潰瘍が癌になりかけていたのだろう。かかりつけの小宮博士は「あなたが酒をやめないなら、私は医師として良心が果せないからもうお宅へは来ない」と、いった。

父は漸く男の四十代を踏みかけていた。遊行坂時代から清水町頃までは、会社も隆運にむかい、横浜埠頭を中心とする商社の内外人に顔もひろくなり、特に花柳界では商売上派手な真似もしていたので、いわば得意時代の有頂天にあったものだろうか。それに身長は五尺六、七寸の壮健な体躯であったから、医者^{いしや}の忠告に耳もかすことではない。

母などは噁にも、父の前では愚痴もこぼせなかったし、ふと顔いろに出してさえ、忽ち食卓が引っくり返された。父の酒の膳に見えたお菜の何かを、ぼくが喰べたそうに見えていたらしく、母の袖を引いたのだった。すると父はやにわに、膳の上の物を悉く中庭へ抛り投げて「酒がまずい」と云い「な

ぜ子供たちにもおなじ物をやっておかないのだ。喰べた気がしない」といつて怒った。乱酔しているばあいは、そんな些事をきっかけに、母をそこへおいて、一時間も二時間も飲みつつ日頃の叱言や母の親類のざんそまでを並べるのである。もし母が口ごたえでもすれば「出てゆけ」となり、時により腕力をふるい出す。まったく手のつけられない暴君になってしまう。

だから微酔のうちの上機嫌な父はいいが、怪しくなると、ぼくら子供を初め、家の内は颱風下の停電みたいなものになる。ぼくは十一、二歳だったからまだよかった。義兄の政広は優形^{やさがた}の美青年である。「政広、ここへ来い」となると、父の荒い酒氣の前におかれて、義兄は油をしぼられた。「大体、貴さまは柔弱でいかん」というのが毎度のお談義の主題であったようである。何を怒られたのか、ある時は、「腹を切れ」とか何とか云われて、女形^{おやま}みたいな義兄が蒼白になった儘、泣いているのを見たこともあった。

家には刀剣などもあったらしい。母は、万一を惧れて、刀の隠し場所に、恟々^{きょうきょう}としていた。いちどなどは、十日も居所不明にしていた父が、やっと帰って来たと思うと、父が困っていたお琴という関内芸妓や茶屋の女将などと一しよに帰って来、さらに母へ酒のしたくをいいつけた。日頃から父の取巻きらしいそれらの人々が散々馬鹿騒ぎをして帰った後で、母が何か一言父へ恨みを云ったとかで、父が立腹し出したことがあった。この時も父はどこからか刀を取出して、「斬ってしまう」と、それを抜いて母を脅した。母は裸足で裏庭へとび降り、幼い妹たちを抱えて夜半まで塀の外にかがみ込んで

いた。

そういう後では、父はさらに大酒を仰飲^{あおむ}って「男の子は男親につくのだ。おふくろの後など追うな。外へ出てゆくと家に入れないぞ」などと呶号し、ぼくらはおろおろ泣くだけだった。

やがて父も二階で酔い臥^ふした様子なので、こっそり裏木戸から母の姿を探しに出た。世間も寝静まってる頃なのに、母はぼくらを抱いてなお動こうともせず、まるで芝居の愁嘆場そのままだが、袖口に顔を埋めて、「……どうしてあんな恐ろしい人へ嫁いできたのだろう」と、くどくどと恨んで泣き、「……おまえたちさえ産んでいなければ」と、身もだえして泣いた。

ぼくら小さい子供らになだめられつつ、その中で、泣けるだけ泣いてしまう事だけが、せめて母が諦めに帰ってくる唯一の方法か、心の処理であったようである。だからぼくは暴逆な父の姿と、母の泣き顔の像とは、今でも絵に描けそうなくらい強い印象を網膜のうちにもっている。特に母の泣き顔の記憶はつよい。ポトポトと小鼻のわきをつたう涙の雫^{しずく}が、けいれんする唇の辺に来て、母の呟く恨み言と一しよに唇のうちへ解けてゆくや、良人の横暴を怒りながら、それを云えないで、子供らに云って聞かせる母の、何ともいい難い青白い八の字眉など、部分的にも思い出すことができる。そしてこんな事は、当然、小さいぼくらの胸にも父への反抗になっっていた。一も二もなく母親へ同情した。けれど母がよく悲嘆の余りに「おまえたちさえ産んでいなければ……」という口走りは、子のぼくらには、ひどく辛く聞えた。何だか、自

分が産れたのが、母にすまないような、へんな味気なさを覚え、自分も母と一しよになっておいおい泣くほか、どうしようもない戸惑いにくるまれた。

父の酒狂ぶりと母の苦勞を書けば限りもない。けれどその他の事も大体似たりよったりのものである。そして、結果においては父の酒癖がついに没落の因ともなり、晩年ずっと病床から起てない宿痼^{しゅくご}を作りつつあったのだが、しかしまた、いついつも乱暴や無理難題を酒癖としている父でもなかった。茶屋へゆけば豪放な遊び方をして、おもしろい人だといわれていたらしいし、家庭で酔っても、どうかすると大機嫌で、大勢の子供や女中を相手に一晩中キャツキャツといわせて無事に横たわってしまうこともある。

ぼくたちは、そんな上機嫌の父親を見ますと、父の膳を取巻いて、父へたかッてみせる。「後ろへ仆したら御褒美をやる」と云う父の後ろから、ぼくたちが大勢して、頭を押したり、喉くびを締めたりして仆そうとする。父と子供らと取ッ組み合いになる。父の髭にジャリジャリこすられると、ひどくこっちは痛い。そして、父の脂ッこい体臭——男親の匂いといえるようなものを、いやというほど酒の香りと一しよに嗅がせられる。父親の匂いもまた、女親の涙のように、子供のどこかへ忘れ難いものになって深く沁みこむ。

上機嫌な父を終日見たのは、父に連れられて杉田の梅林へ梅見に行ったときである。あちこちの腰掛け茶屋で一本飲み二本飲み、父はいつか泥ンこに酔ってしまった。乱痴気な酔漢を路上に見るのは珍しくない時代であったが、父の酔態は、

そんな酔っぱらいの多い梅見客の中でさえ人目をひいた程だった。ぼくはまだ小ッぽけな少年だし、人目にもきまりが悪く、この父親を連れて帰るのにまったく当惑した。父は磯子のトンネルを出た所で、浜辺の草むらに寝てしまい、ぼくは夕焼けの海を見ながらベソを掻いていた。そのうちに、通りがかりの俵屋が訊ねてくれたので、所番地をいって、俵の上へかつぎ上げてもらい、ぼくも俵に乗って帰った。あとで考えると、この日の父の姿ほど、なつかしいものはなく、どこかにそうした放逸な風もあった人だったかと、ぼくがその当時、まだ父と一しょに酒が飲めない年頃だったのが惜しまれる。

めったには、子供など連れて出ない父だが、もう一ぺんこんな事があった。夏の夕方である。めずらしく上布じょうふか何かの和服すがたで、父が「英ひで。散歩に行こう」とぼくを連れ出した。伊勢佐木町の通りを、涼み姿の人影に交じって少しあるいた。父は書店の前に立ち「何か買え」というので、ぼくは「少年世界」と、その頃、時事新報社から創刊された「少年」の二冊をえらんだ。

すると父は、鉄かねノ橋を渡って、関内の或る待合の門まで来ると「家へ帰っていい」と、ぼくを放し、そして「お父さんは途中で会社の友だちに会って、一しょにほかへ行つたと云えばいいんだよ。よけいな事を云わなくてもいいんだぞ」と念を押された。

けれどぼくは帰ると、有りの儘を正直に母へ話したものとみえる。そんな事はもう忘れていた頃、父は晩酌の膳に向いながら、いきなりぼくへ「貴さまのような奴は大ッ嫌いだ」

と、烈しい口調で云った。「一たん男が云うなと云われた事は、口が裂けても云うもんじゃない。それを、なんだ貴さまは。貴さまみたいなオシャベリな奴は見るのもいやだ。あっちへ行けっ」と、ひどいけんまくで叱られた。理窟も何もあるのではなく、父は極端なエゴで極端な感情家だった。そして、自分の暴言を理由づけるためには、自分が幼時にうけたサムライ格言をもつて来て、母にも子供たちにもそれを鉄則として強いた。だから外では花柳界にもて囃はなされる寛度の風流を示しながら、家では反対に嚴父の威を保とうとするらしく努めていた。外の父と、内の父と、どっちが本質なのか、ぼくらには分るはずもなかった。

これだけは両親の談合上で仲よく始められた事にちがいないが、父や母の考えが、どこにあつてやり出した事なのか、ぼくには今もよく分っていない。というのは、何不自由もない父の全盛期であつたのに、家に大工が入って、表門も玄関も改造しはじめ、ぼくの家はとつぜん「みどり屋」という紺暖簾こんのれんを掛けた雜貨店にvari出したのである。

近所ではみな眼を瞠みはって驚いたらしい。何しろ前にもものべたように、赤門前一带は閑静な住宅地で、わけて清水町一番地の角地にあつたぼくの家は、家の横から門の前も、きれいな小溝が流れていて、幅一米余の小橋が架っているのである。だから門を取払って、玄関から建て出しを設け、そこを店舗としてみたところで、お客はいちいち小橋を渡って来なければ商品を覗くことさえも出来ないのだった。

すぐ南隣りは、大串おわぐしという呉服問屋の大家の住居で、これも同様な橋懸りに長い黒板塀をめぐらし、その先も、また赤

門寄りの静かな通りも、すべて生垣や門構えばかりである。ただ近所に変った家といえ、カゴ虎という俣宿と、英町の近くに、駄菓子屋、焼芋屋、小間物屋ぐらいがチラとあるだけの界限だった。人通りとて、ほとんど少ない。そんな所で一体、どんな客を目標に開店したのかと、近所が怪しみあったのもむりはない。

けれど父は大真面目でこれに資本をつぎ入れたものである。

“みどり屋”という屋号は、父の出生地である小田原の緑町をとって名づけたものだと思ふ。母はまたよく向つて、「お父さんは、どうしても英は実業家にする。そのためには、今から商い^{あきな}を覚えていなければいけないって、それでこれを始めたんですよ。だから、おまえがいちばん一生懸命にお店番したり、学校のひまには、そろばんや商品なども覚えるようにしなくてはいけませんよ」と云つた。父もまた、おなじような意味の事を、よく云つた。だがよくには、何かちつとも得心がいかなかった。唯、家の景色がガラリと變つた事やら、世間の風がじかに家庭へ入つて来る感じなどで、わけもなく物珍しい好奇心に唆^{そそ}られていたのであつた。

赤門前の“みどり屋雜貨店”は、こんな風に父が始めたものだった。父は、その頃のお金で三千円を投じたといつていた。いわゆる士族の商法だった。松影町で松屋といつていた内外雜貨問屋がある。仕入れは一切、松屋まかせであつたという。

いよいよ開店の前日などは、松屋の番頭小僧が七、八名もやつて来て、夜通しタスキがけで商品の陳列やら正札附けにかり、松屋の支店みたいな恰好で働いていた。そこへ祝い

物が届くやら、来客や手伝い達に酒を振舞うやらで、徹夜のお祭り騒ぎであつた。

そしてさて、福引附きの売出しを始めてみると、その三日間だけは、お客も物珍しそうに、店の前の小橋を渡つて買ひ入つて来、店番には、松屋の番頭が三日だけ坐つてくれたので、母もぼくもただ奥の茶の間から店の景氣を覗きあつて、

「そろ、またお客さんが入つて来たよ」とか、「あれも売れた、これも売れた」などと面白がついていただけにすぎなかつた。

けれど福引がなくなると、がたと客足は減り、たまに客が入つて来ても、母はお愛想を云うのさえ顔を紅^{あか}らめてしまふ風だし、ぼくらは奥へ逃げ込んで女中を呼びたてる始末なので、何とも妙な事であつた。けれど日がたつにつれ、いつか皆、店番にも馴れ、元より利益も何もあつたわけのものではなかるうが、みどり屋の暖簾だけは、朝な朝な、わが家の軒に懸けられた。

以前の習慣で、斜向^{はす}いにあつた俣宿のカゴ虎の若い衆は、毎朝、ぼくの家がまだ戸を開けない前に、家の前の往来から小橋の上をきれいに掃いて、打水までしておくのだった。で開店後も、店が開いたと見ると、暖簾はその若い衆が来て懸けてくれる。

ある朝、父の出勤間際、父はカゴ虎の俣に乗りかけながら、頻りに、軒の紺暖簾をながめていた。それは自分の字を染めたものである。暖簾の一片一片に、み、ど、り、屋、雜、貨、店、と一字ずつ区切つて大きく書いてある。その晩、歸つて来ると、父はさつそくぼくの義兄に墨を磨^すらせ、太筆を持つ

て何枚となくその七文字を書き直していた。そして急に、暖簾の染め更えを母に命じた。母はしきりに「勿体ない」といつて洩ったが、「どうも書体の坐りがわるい、朝晩、気になるから取更えろ」といつて父はきかなかった。まったく落語の「士族の商法」通りであつた。自然、カゴ虎でも、松屋でも、また出入りの人々でも、その人たちの世間的な眼から見たばかりの家庭というものは、よほど浮々していて、滑稽に見えていたことだろう。いまは得意の絶頂だが、あぶないもののだといったような世間の蔭口もささやかれていたにちがいない。

ぼくが学校から帰つて来ると、店には店番もいないのに、奥の茶の間では、三味線の音やら賑やかな笑い声がしていることがよくあつた。

妹たちのために、一週間に何度か、踊りのお師匠さんが来る。それをすすめたのは、どうも義兄の政広らしい。義兄は小田原の花柳界で育つたので、踊り、長唄、芸事なら何によれ上手であつたし、また好きであつた。もちろん父の承諾をえた上だろうが、母も父の放埒な行状や家事の行く末にクヨクヨするのを忘れて、せめてそんな事にでも気を紛らわせようと努めていたふうがある。

踊りのお師匠さんはソレ者^{しゃ}上がりらしいきれいなお婆さんだつた。紹介者はすぐ近所に住んでいた近藤夫人である。近藤夫人のいまの旦那は普門院の住職だということだが、以前は富豪な外人の洋妾であつたという。子どもまで産んだので、その外人が本国へ帰るさいに、一生涯の養育費と生活を保証してゆき、お蔭でいとも安楽に暮しているという婦人であつ

た。

外人との間にできた子は、その頃もう十七、八になってい、エリザベス女王型の美人であつた。ぼくたちは「オテイちゃん、オテイちゃん」と馴れっこく呼んでいた。オテイちゃんは洋装したことがなく、いつも袂^{たもと}の長い和服を着ていた。背が高いので、帯附きもよく似合う。「あれで、あいの子でなければ」と、云う人もあつた。

オテイちゃんは陽気な性で、オテイちゃんがわが家へ来ると、母も日頃の苦労顔をどこかへやって笑いこけるし、家中がオテイちゃんにつりこまれて陽気になった。

オテイちゃんには一人の妹がある。ふみちゃんといつた。ふみちゃんはぼくと同級生であり、気だても姉とは正反対に内氣にみえる。そしてこの妹の方は、近藤夫人のいまの旦那の子であると聞かされていた。そう聞くと、どこかお坊さんの子くさい所もあつた。けれどぼくは、おない年でもあり、ふみちゃんとよく遊んだし、また少年期の初恋みたいなものをほのかに抱いていた。

けれど、ふみちゃんは、姉と一しよにぼくの家へ来ても、めつたにぼくへ口もきかないし、遊ぶといつても打解けてはくれない。唯一ぺん、月の晩、大勢で隠れンぼをしたとき、二人してよその小暗い^{おくら}堀の蔭に潜み、やがてほかの子がみな出て行つても、二人だけで寄り添ったまま、そこに屈み^{かが}こんでいて、おたがいの息づかいを意識しながらわざといつまでも隠れていたことがある。

一葉の「たけくらべ」をみると、浅草界隈の事だつたあの時代の世間が、横浜のぼくらの子供仲間にもそっくりその儘

あった気がする。オテイちゃん姉妹のことを、今でもこう鮮やかに臉に描けるのは、やはりもうぼくの少年期にも、はっきりした異性への思慕が芽生え出していたからであろう。けれど、ふみちゃんに關するかぎり、思い出せる濃い記憶は、その月の晩一ペンの事でしかない。ふみちゃんは、学校の卒業まぎわに入院し、やがて病院で死んでしまった。胸が悪かったのかもしれない。ふだんからそんな翳の見える少女であった。

陽気なオテイちゃんは、いつも陽気に見せている裏に、じつはぼくの義兄政広に恋していたように思われる。けれどオテイちゃんも恋をすると日本娘とちがわなかった。はにかみやら周囲の眼に怖れて、ほんとの想いとは逆に、まったくべつな形で振舞っていたものらしい。少なくともぼくの母を初め女中たちまでが、そんなふうにオテイちゃんの胸を見すかしていたように思う。

ひと頃、やはり近藤夫人の姪で、竹子という娘なども、義兄を繞^{めぐ}って、オテイちゃんとの恋争いの図を見せていた。竹子という女性は、いつもこっそりと、見るからに濃艶な粧^{つく}りをしていた。オテイちゃんの蔭口では、彼女は賑座の市川市孝という俳優が好きで、贈り物をしたり、楽屋見舞に行ったり、たいへんな熱の上げ方だなどという事だった。そんな噂もウソとは聞かれなような娘であり、近所でもいい評判はしていなかった。

それにしても、義兄の政広の姿が、ぼくには嫉^{ねた}ましくみえていた。また、義兄自身もその頃は、何となく浮わついていた。

た。自分の美貌にうぬぼれていた風がないではない。ある一夜などは女装してオテイちゃんと一しょにどこかへ遊びに行行った。まだ寒い二月頃だったので、その頃流行っていたお高祖頭巾^{こそうずきん}を被り、白粉^{おしろい}をつけ、女の着物、女下駄で出てゆくのを、母も女中も笑い囁しながら見ていたが、やがて何時間もたってから澄まして帰って来た。オテイちゃんと並んで伊勢佐木町を歩いて、たれも女とのみ思つて怪しむ者がなかったといつて、義兄は自慢そうに話すのだった。こんな風に女に好かれた兄だし、酔えば芸事の限りをやって見せるので、父が大酔して癪癖を發するとなると、忽ち日頃の氣にくわれないものが出て「大体、貴さまは柔弱でいかん」となり「それでも男子か」と辱^{はづかし}めたり、腹を切れなどという暴言にもなるのであった。

ところが、この兄も、そんなやさ男のくせに、じつはなかなか剛情な人だった。長年、実父を離れて育ってきた叛骨も内にもつていたのである。だからよくお談義をくうと「ぼくは独立します」と云つていたものだが、ついに父と大喧嘩してまもなく家を出てしまった。そして、元町辺のある相場師の二階に間借し、そこから左右田銀行に通つていたが、いつのまにかその娘のお八重と恋愛におち、お八重は義兄の子を宿していた。

「梅暦」読み初めし頃

まもなく、ぼくには嫂あによめというものができた。

義兄が結婚したのである。

いきさつは、後での事にするが、とにかく自分たち家族の中に、若いきれいな嫂が忽然と生活に加わったことは、やや何かが分りかけつつあった十一、二歳のぼくという弟にとつては、内々、小さくない動揺であつた。生理的にも精神的にもである。朝夕、まばゆい気もちだつた。それまではそう身近に知らなかつた粘液感を伴う匂いなどに知らず知らず敏感になつていた。のべつ理由のないはにかみに行き会いながら、そのくせ、嫂が義兄にそつとしてみせる一顰ひん一笑を偷ぬすみ見たり、ぼくの御飯茶碗へ、兄のついでに、御飯を盛ってくれる白い指先へ、特異なよろこびをもつたりした。

すべては少年の「性」の変形であつたとおもう。本来の芽を嫂の美に促進された性細胞が、複合的にその發育を目ざましくしている事にすぎないのであらう。無自覚な冒瀆ぼうとくだが、美しい嫂は、唯、美しい異性としかぼくの眼には見る事ができなかった。

そんな意味で、嫂のお八重という人の存在は、わずか半年そこそこでしかなかつたけれど、弟のぼくにも、成人への一段を、踏み上げらせていた人だつた。

ぼくの眼には、熟れた異性そのものに映つていた嫂も、じつはまだ数え年の十七にすぎなかつた。女学校も出たのかどうか。家事向きの事とか、躰しづけとかいったような、女の用意は、ちツとも身につけていた風ではない。朝起きると、湯殿部屋へ入つてしまつたぎり、なかなか出て来ないのが常例だつた。やがて出て来ると、家じゅうの眼をみはらすような濃い化粧を見せ、着物も毎朝違つたのに着更えていた。

朝といえ、ぼくらの家でも、店を開けるやら父の出勤支度やら、ぼくら大勢のチビが一人一人学校へ出てゆくやらで、母も女中も一頻しきりは、てんてこ舞いをやっている。だが、嫂は幾月たつても、花嫁として来た翌日のようだつた。髪の毛一すじも気にしながら、この大家内の中では身の置き場がないような姿をしていた。義兄のそばでお給仕したり、やがて、銀行へ出勤する義兄を送るぐらいが、せいぜいの新妻ぶりであつた。

もっとも、ぼくらと一つに暮し初めてから幾月もたたないうちに、嫂のお腹は目だつて大きくなつていた。彼女にすれば、初めての経験だし、起ち居も苦しいのであつたらう。母は、ぼくの義兄とは、文字どおり義理の仲なので、なおさら気をつかつていたに違いなく、始終、嫁を宥いたわり庇かばう容子がぼくらにさえ分つた。

また、気むずかしいはずである父の方も、元々、結婚前の妊娠を認めて家庭に入れた事であるから、それについては勿論、ほかの点でも一切、緘黙かんもくを守っている風だつた。といつて、気に入っていなかったのはいうまでもない。――ぼくら小さい者の感覚では、嫂が家庭に交じつてからのいざこざ事

は何もなかったように思うが、問題はむしろその前にあったらしいのである。

つまり、感情の激発やら、折衝のいざこざなどは、結婚にいたるまでの事前に、もうさんざんやってしまっていたのだ。そして、以後の苦しそうな緘黙は、その紛争に負けた父がいやおうなく支払わせられていた敗北の賠償だったように思われる。

さきにも、ちよつと触れたが。

義兄が父と喧嘩して「ぼくは、ぼくで独立します」と威勢よく下宿生活へ移って行ったのはいいが、まもなくその下宿先から飛んでもない尻が父の許へ持ちこまれた。

これが元町の山田という相場師だった。銀ギセルを横啞えに、唐棧とうさんの羽織に角帯といった風采で、見るからに、ぼくの父などとは肌合ひの違う人であった。体格もでっぷりとして、仲通りの相場師仲間でも怖がられた者だったそうである。

義兄の政広が、下宿中に、妊娠させたのは、この人の娘だった。「どうしてくれる？」という事になったのだろう。強硬な相手に出会うと相手を超えて強硬になるのが父のつねだった。父と山田とのぶつかりあひは闘牛場に選り出された二頭の角ツキ合ひみたいな結果しか出なかったろう。——何でも薄々ばくらも覚えていたが、見つけない、いろんな男が掛合ひに来、また仲介人が入ったり、しまいにはお茶屋の女将らしい人々まで来て、父の居ない留守に母を説くなど、ごたごたし通していたような記憶がある。

こんな問題は、今なら殆ど問題になるまい。しかし明治の

静かな世間では、物議ぶつぎの元になったのだった。一般の通念にある風儀道德とか、つよい家族連帯の責任などから、義兄の勤務先の左右田銀行や父の周囲にも憚はばられたにちがいない。——結局、父が折れて「結婚させる」そして「家庭に呼びもどす」となったのである。人いちばい自我のつよい頑固な父も、子の為に、煮え湯を呑む思いで忍んだものだろうと察しられる。そして嫁入り支度、婚礼費用一切のほか、ついでに山田からはいろんな負担を持ちこまれ、物質的にも相当痛いことであつたらしい。

挙式はどこでしたのか、式も披露宴も、自宅で行ったのか、その辺はよく覚えていないが、とにかく嫂の嫁入りは夏の暑い頃であつた。二階の四部屋ほどが全部客席にあてられ、階下には茶屋の女将や男衆までが来て配膳にかかりきっていた。ぼくら子供は、この盛観にはしゃいで、口取りのキントンや蒲鉾かまぼこの列に眼をみはり、母から「外へ行って遊んでいらっしやい」と云われれば云われるほど、家の中にねばっていた。そして、宵になると、小さい兄妹達がみなして代わりばんこに、梯子段を盗み足に登って行つては、宴会の灯とお嫁さんを覗きに行った。

ただこんな時には、いつも手伝ひに来てくれて、陽気な調子で、茶の間や台所じゅうを笑わせ抜くあの混血娘のおティちゃん、その日は姿も見せなかった、おティちゃんだけでなくお母さんの近藤夫人も二階のお客の中にいなかった。もっとも、おティちゃんの足が自然遠くなったのは、その前からのことで、薄々、義兄と下宿先の娘のことも、耳にしていたにちがいない。ぼくにはまだ、おティちゃんの気持ちにな

ってみるまでの能力はなかったが、後で思うと、おテイちゃんはその晩、独りでどこかで泣いていたのではあるまいか。ただし、それはぼくの想像である。ぼくが当夜の義兄ぐらいな年齢に達してからそう思われた事にすぎない。

披露宴からすぐ新婚旅行へ立つという極りのいい今の習慣は、あの頃にはまだ無かったのではあるまいか。欧風米式、何でも新奇を競って、東京人の洋服や着こなしを、田舎くさい官員さん好みと笑い、ナンキン町仕立ての洋服を粋^{いき}としていた横浜人の間にも、新婚旅行の風だけは、まだ見なかったように思われる。

だから義兄の結婚も万事家庭で行われたのだろうが、偶然ぼくはその為に、当夜、花嫁花婿の初夜の有様を何とはなく見てしまったのである。

いつもは二階に寝るのだが、その晩の部屋の都合から、ぼくは階下の中庭をへだてた向う側の一室に寝かされていた。夏なので十畳蚊帳いッぱいに、寝具は三ツ敷いてあった。その端の一つにぼくは寝ていた。

どうして眼が醒めたのか、ぼくはふと、うつつを覚えていた。もう夜更けていたに違いないが、まだお客の笑い声やら片づけ物の忙しげな音が遠くでしていた。そして見るともなく蚊帳の中を見まわすと、真ん中の寢床は宵のままだったが、それを措^おいて、も一つさきの端の夜具に、誰か寝ていた。

ほの暗かったが、花嫁の白い顔の一端がすぐ分った。その白さがまるまるこっちへ見えないのは、義兄の顔に隠れているのだということもすぐ覺^された。二つの枕がそのように並ん

でいる光景がたしかに強いショックではあったと思われるが、それは今になって多分そうだったろうと推測されるまでであって、その時の直感は大入のもつ意味の衝動といったようなものではない。

いま考えてみるのに、まじまじとそれに視覚を灼きつけられながらもその連想がすぐ生理的にぼくの体にあらわれたり、悩んだりしたような覚えはどうもなかったとしか思われない。それよりは、男と女とがそうして寝るといふ實際を初めて見た驚異の方がまッ先にぼくを痺^{しび}れさせていたのだろう。そして無自覚に薄目を作^な作していたことだの、はからずも見えなない秘密を見たとおもう体のすみや胸の動悸は期せずして一つにしていたようである。それ以上、肉体上の空想には思い及んでいなかった。

もっとも、ぼくの印象自体が、じつは半寝ぼけであったかもわからない。けれどそれにしても胸がつぶれるような息のこらし方をしていたし、そうしているうちに、花嫁と義兄の影がそこはかとなく寝姿のかたちを更^かえていた事だの、蚊帳の青い波がぼくの頭のあたりへまで静かに揺れ縋^よれてきた気配などまで、今でもかなりある部分は鮮明に記憶をよび出すことが出来るのである。そして総合的には決して醜い生き物の行為としてではなく、ひどく幻影化された美しいあるものの秘戯^{まつげ}を睫毛越しに透^{すか}して見たという程度にしかぼくの肉体には影響していなかった。ひとえにそれは花嫁も文金の高島田を大事に枕にのせていた初夜のためであつたろう。そして又、ぼくにとって生れて初めての驚異すべき目撃の一つが、そうした美しさに見えたということも、なおすばらしい幸福

だったように今でも思われている。

——ま、それらは、ともかく、肉親の縁にも薄く、孤独と不幸をすでに幼少の生い立ちから持っていたような義兄政広は、こんな風に、また結婚の一步を、複雑に踏み出していた。そしてその結婚が、幸福なものだったかどうか、頗る疑問な点である。

なぜなら、そんな大騒ぎを周囲にさせて嫁いで来たのに、嫂のお八重は、それからわずか半年ほど後に、元町の実家へ帰ってしまった。それも義兄と相談ずくでもなく、義兄が銀行へ出ている留守に、買物に行くといつて出たまま戻って来なかったのである。もちろん、義兄が迎えに行ったり、父と山田との間にも、再々仲人を介してごたごたの繰返しが始まったが、話の落着きは、山田の代人が、嫁入り道具衣裳持ち物の悉皆を受け取りに来たのが最後であった。

「わかったか、貴さまは、山田夫婦から、お坊っちゃん育ちのいい鴨と見られていたのだ。色男ぶって、いい気になるからこんな目にもあうのだ」

父が義兄にずけずけ云ったことは余りに痛烈だったから、ぼくら小さい者の耳にも沁みた。二階から逃げるように降りて来た義兄は、女中部屋の片隅でいつまでも泣いていた。その二、三日は、瀬戸物の音までが何か物淋しい家の空気と、お腹の大きな嫂の美しい姿が消えた物足らなさに、小さいぼく達まで何となくひそまっていた。

それからよく父は「何だ、惚れた女にすら見捨てられるような男が」と義兄を痛罵したりして、その都度、義兄の顔がさっと青白んだり、母が自分の傷みでもあるかのように眉

をひそめる場合などをまま見たが、しかし、それとて父子の間のことでしかなく、いつか義兄も元の独身に馴れ、ぼくらの腫の嫂も、一時の影絵みたいに、生活の中から忘れ去っていた。

こうして義兄の結婚は一場の悪夢に似ていた。しかし二人の仲は、元々恋愛とまでいえる程な相思の愛ではなかったのだらう。案外、その後も義兄の容子に未練もみえないし、以後、お八重の方からも、子どもが産まれたでもなし、よそで義兄と会っているふうもないので、女ごころをめぐらしては、蔭でキヤキヤ苦労していたぼくの母などは、何か独り相撲でも取っていたような思いであったのだらう。後ではかえって何かぼかんとしてしまった容子だった。

「ほんとは、兄さんもまだ子供なのね。おまえと、おなじようなんだけれど、他人の手に育ってきたから、どこか大人びているのよ。お父さんのお談義でも、もつと子供っぽくしていればよいのに、大人みたいに受けているから」

母は、自分も常に暴君の良人にこらえかねては、つい深刻な場面を、ぼくらへまま見せたりするくせに、ふと、義兄と父の仲について、そんな呟きをぼくにした事があった。

けれど、母が、異母子のぼくの義兄を、心から庇っていた優しさは、その後も変えることはなかったし、ぼくら小さい者が「兄さん、兄さん」と、寄りたかって慕う様も、父の機嫌がどうであろうと、何の変化もありはしなかった。

殊にぼくはそろそろ学科以外の読書欲に燃え出し、少年雑誌へ投書することを覚えたり、学友間でコンニャク版の同人雑誌めいた物を出しあたりし初めたので、そういう話し相

手には、家では義兄以外に語る人はいなかった。よく作文を見てもらったのも義兄だし、自分の想うこと何でも、とにかく、十七文字にまとめてもらえと、初めて俳句かの如きものをばくに作らせたのも、この義兄であった。

義兄にすすめられて、俳句らしきものを作りかけた頃の、その俳句では、ひどく心外だった事がある。

小学校での綴り方は、その頃、記事文といったり、普通、作文といったりしていたが、いわゆる文章体で、たとえば「某日友人ト観梅二行クノ記」とか「天長節ノ感」とか題からして漢文調のものだった。

その作文の中に、ある折、俳句を入れて、先生に出していただいたのである。水谷先生であった。この半禿頭の温雅な先生は授業熱心で生徒によく慕われていた。ところが、先生が後日、ぼくの作文を手に、顔を朱にしてぼくを戒めた、ことばの要は「作文は、自分の心を率直に云い現わし、文は自分の頭脳で綴るべきものである。いやしくも他人の詩歌などを、自分が作ったもののような振りしてさし挟むべきではない」という叱言だった。

先生は誤解している。俳句は、自分が作ったものだ。ぼくはそれを云おうとしたが、優しい水谷先生が耳の辺まで朱くして云っている余りな真剣さに、つい抗弁ができなかった。ぼくは泣き虫の性だったとみえ、ただ涙をこぼして引っ込んでしまった。そして以後は、それにこりて、俳句などは決してひとに見せなかった。

その南太田尋常高等小学校の裏門のすぐそばに、貸本屋の

看板が懸っていた。ぼくら男生徒は、そこを裏門といっていたが、女生徒専用の通用門だったのである。ぼくは、学校が退けると、表門から女生徒の門へぐるりと廻って行って、毎日、その貸本屋へ寄り始めた。

貸本屋の主人公は、学校の小使さんだった。だから顔も分っていたし、ぼくの家も知っていた。鞆を外すと、その薄暗い小部屋に寄りかかって日に一冊ずつ読んで帰った。それがおもしろくて止められなくなっていた。

なぜ家で読まないかといえば、義兄に見られても母に見つかっても、叱られるに極まっている本だったからである。自転車お玉、岩見武勇伝、稲妻小僧、田宮坊太郎、鬼神のお松、何でも棚にある物は無差別に読んで行った。いわゆる大阪版という講談本だ。厚ぼったいが、読みではなく、一時間か一時間半で一冊は読めてしまう。半年もたつと、もう小使さんの家の棚には、ぼくの読む物はなくなってしまった。

ぼくのこんな悪書の濫読は、家では誰も知らず仕舞いだった。これがどんな悪影響をぼくにもつたかは、いうまでもない。もし、両親が義兄でも知ったらきつとその害に戦慄したことだろう。それほどひどい物だったし、家庭人の児童にたにする読書の監視は、やかましかった。それなのにぼくは、人知らぬまに読んでいた。

貸本屋を卒業すると、まもなく縁日の露店の古本屋で、涙香の翻訳物や押川春浪の冒険物などを漁り出し、それが昂じて、すぐ帝国文庫へ手をつけ出した。何しろその頃の旺盛な読書欲は、蚕が桑を食うような早さであった。本を買うのに、小遣いが間にあわないのである。帝国文庫に眼をつけ出したの

は、何しろあの五、六百ページもある厚さが魅力だったのだ。いやそうとばかりはいえない。あの中の近松物、西鶴物など、その頃は殆ど初版だったから、総てフセ字なしであった。フセ字なしの「春色梅暦しゅんしよくめいれき」をばくは十二、三歳で読み耽ふけっていたわけである。太平記、西遊記のような物でも、幾晩かで読み終ってしまう。「寝ないか。まだ起きているのか」と父に叱られ叱られ、寝床の中で眼を赤くして読んだ。

梅暦は、ついに父に見つかって、風呂の焚き口へ抛なり込まれ、眼の前でタキツケにされてしまった。涙がにじんだ。米八の白い脛はざだの仇吉の艶な姿を火の中に見ていたのである。

何しろ家庭も派手すぎていたし、ぼくの素質も素質だし、ここ数年の少年期が好ましい温床にあったとはどうも思い難い。しかし、父も母も、決して子の教育を放任していたわけではなかった。日課はもちろん、朝夕の礼儀、言語、服装、举止、遊戲にわたるまで、厳格さは以前どおりである。教育方針の鉄則だったのだろう、人手もあるのに、父はわざと子供らに、風呂場の水汲みをやらせたり、遠くの使いに歩かせたり、時々、唐突な無理を命じることとちつとも変りはない。

遊行坂時代ゆぎょうざかに初めた漢文の夜学通いも、清水町へ移ってからは、横浜の端れから端れみたいに遠くになったので、一週一度土曜日だけになっていた。これも最初は、きちんと通学して、かたの如く、岡先生の素読をうけていたが、父の前で復習する例がいつか無くなってきたので、ぼくも怠ることを覚え、岡先生の家へ通うとみせて、じつは土曜日の晩という

と、伊勢佐木町をほっつき歩き、喜樂座、賑座などの立見をしたり、どうかすると、その頃、甚ださかんだった源氏節げんじぶし芝居を、密かに覗いたりした。

源氏節のフシはいま思い出せないが、浪花節芝居に類した寄席の小芝居で、特徴は、出演者がみな女で近年のストリツプショーの狙いとおなじだった。これは一時、興行物を風靡ふうびしたが数年にして禁止された。演だし物は、歌舞伎物を掲げていたが、元々、演技が主でないから、ぼくら少年が覗いてみても、後をひく魅力はなかった。——とかくこの頃から心をひかれ出したのは、ふつうの演劇であった。ぼくは盲目的に芝居好きになり初めた。

芝居見物という当時の通念では、一年の内でも、それはよほど恵まれた或る日の幸福で、平常、小学生が芝居を見たいからといって、家庭の父兄が許すはずもなかったし、自分の口からも云えなかった。それなのに、ぼくは土曜の晩には、例的一幕見だが、伊勢佐木町の小屋を順ぐり見ていたし、日曜なども、こっそり行つて、追い込み席の中に交じっていた。

そういう小遣銭は、どうしたかといえ、金などは児童の手にしてならない物というのが常識だった頃である。何か正しい理由がなければ母へねだる事もできなかった。ところが家庭の一隅に、みどり屋雜貨店がある。ぼくは、その売溜めから自由に銀貨を持ち出すことができた。——自由にといても、もちろん、家人の眼を偷ひそみすることなので、智恵と敏捷を必要としたのはいうまでもない。こんな行為からみても、ぼくという素質がじつに危なっかしい子であったことは間違いないかった。正直、その頃の罪を意識しない悪智の例

を幾つとなく考え出すと、今でも肌がそそけだッてくるような思いにたえない。

喧嘩

——そんなふうですでに悪智恵も相当なぼくだったが、しかしそのぼくは誰の目からも「おとなしそうな」と見られていた。

「いつも、きちんとしていらっしゃる」と賞められたり、殊にぼくは体の小さいことと笑^{えくぼ}靨の深いのが顔の特徴であったらしくて、家庭の女客などからも、あいさつに出ると「ま、お可愛らしいお坊っちゃんですこと」などとよく云われて、自分の悪い面だの内面の芽生えは周囲の大人たちからは、いっそう看破されていなかったようである。

家庭の客と、その家の少年との関係を、いまとなつて考えてみるに、きれいな女客の印象は、男の客よりもはるかに複雑な記憶をつよく残している。逆に、客が男性で一方が少女のばあいにしても事はおなじなのではあるまいか。いったい日本の家庭では、極めて封建的などいわれたばかりの少年時代でさえ、日頃のしつけはやたらに厳しいくせに、外からの客と親共とは案外なことを子供の前で迂^う濶^{かつ}に喋っていたように思われる。

ところが、子供はまま客と親共の会話のあいだから大人も

思い及ばぬ程なものをしばしば嗅^くぎとつてしまふのだ。「子供だから分るまい」という共通な多^た寡^かのくくり方は、たいがい大人たちの滑稽な浅見か親馬鹿のひとりぎめと云つてよい。元より大人同士の秘語を子供が正しく理解するわけでは決してないが、しかし成長期の児童という貪欲な肉塊のなかには、蠅取草の消化力みたいな摩^ま訶^か不思議な作用が潜んでいるものようである。大人同士のちょっとした会話の端を耳に捉えて、いつか理解以上の理解を醸成しながらそれを密^{ひそ}かに自分へ栄養づけていくところは蠅取草の生態とちつとも変わるところがない。

たとえば、ぼくにはこんな一、二例の経験がある。——といつても、ぼくは自分の少年期をどだいにしての事なので、一般の家庭やほかの子供には共通しないことかもしれない。けれど、「子供だから」という通念と、大人の油断は、どこか家にもありがちのようであるから、余りお上品なはなしではないけれど、愚を承知しつつ書きとめておく。

客は、どこかのお茶屋の女将にちがいない。お中元やらお歳暮に來たのやら、季節もはつきりは覚えてはいない。それなのに、ぼくはその女客がお茶屋の人だと分っていた。父が遊びざかりの時代で、幾日も家に帰らないでいた父が、酒くさい姿を、妓^{おんな}たちに囲まれながら、しばしば家へ送られて來たりした。その中で見た婦人だったからであらう。

土産物など横において、その女将がぼくの母へ何か喋りぬいていた。もちろん父の留守にである。すると女将のことばのうちにお琴という名が度々出た。お琴というのは、父がよそに困っていた婦人である。女将はさんざんその女のざんそ

を母へ告げていたようであつたが、ふと妙に声をおとして「——それにまた奥さま、あのひとときたら、関内（花柳界）に出ていた頃から、とてもお床がよかつたんですって。何しろもう泣くんだっていうじゃござんせんか」と云つて、みだらな声を笑いこぼした。母はたしかまだ乳呑みの末の一女を乳ぶさに抱いていたように思う。そして何とも返辞に困つたような迷惑顔をあからめて、自分の乳くびへ深くさし俯向うつむいてしまつたのであつた。ぼくは何でそこにいたのか、とにかく、そばに坐つていたのである。もちろん客も母もぼくの居る居ないなどは問題としていなかったにちがいない。

もう一度は、ある日曜日だつた。父の居間に午後から喋っている長つ尻な婦人客があつた。富樫さんと覚えてゐる。富樫さんの主人は、いわゆる浜の商館番頭なる者であつた。海外的の珍しい物など手土産にしてはよく夫婦して見えるわが家のお馴じみ客であつたが、この日は若い夫人だけで、食卓にはお酒も出ていた。それを共にしながら、夫人はさかんに「お宅は羨ましいわ。私も子どもが欲しくて欲しくて、いろんな事をしてみたんですけれど」というような意味をぼくの父へ訴え出した。母も交じつて居、父が何か冗談めいたことをいうと、母が「ばかな事ばかり仰ツしゃつて」と、一しよに笑ひ興じていた。が、そのうちに、少々、浮わづつたような調子で「いいえ、ほんとなの。ほんとに、うちではだめなんですよ。いつも、私の方がこれからと思つてゐるのに、たくの方ではもうすんでしまつてゐるんですもの」と云うのが聞えた。そして酒の上の父が、何かまた大胆な閨房の秘語を飛ばしたとみえて、つづいて母が「ま。およしなさい。いくら御

冗談でも、よその奥さんに」と、すこし不機嫌に云つたのが、何の意味か、ぼくにはおぼろに分つていた。

ぼくは客間に居たのではない。遠くのぼくの机にまでそれが聞えていたのである。前のお茶屋の女将のばあいといい、このときの片語も思い出せる程なのは、そのさい少年の脳裡によほど、つよく響いたからであらう。何しても無影響ではありえなかつた。

もちろんそれは理解というような事とは違ふ。さきにも云つたように、理解以前のものにすぎない。

けれど、その面の児童の危険期ともいえる問題は、どうも理解以前にあるもののようである。ぼくを例にしていえば、ぼくはもうその頃、誰にも内緒で「梅暦」や近松もの西鶴ものなどは読んでいたし、特に「竹田出雲浄瑠璃集」のようなまる本でも自由に手に出来た時代であるから、それが、文学上の何であるかなどは夢中でただ耽読してゐたものだった。だから茶屋の女将や、富樫夫人の云つた会話の端も、それが大人のどんな意味の隠語であるかぐらひは、薄々ながら直感してしまふのであつた。——それなのに、大人たちが、えてして、子供の前で、不用意な過ちを冒してゐるのは、まったく、子供の内面成長をおろそかに見、かつて自分の幼い肉塊が、あの貪欲な摂取欲をもつ蠅取草のような生態のものであつたことを、忘れるともなくいつか忘れてゐるからにほかならない。——と、ぼくは思うのだが、しかし、そう考えるのはひとりぼくのみが例外に早熟だったせいであらうか。統計に依つたわけでもないから、一般的な確言はしにくい気もするのである。あるいは、子供の中に伸びつつあつてしかも外

に見せない子供の性のすがたは、それぞれ、もっと底深い個人差を意外なほど持っているものなのかどうなのか。

一見、他人からぼくが「良い子」に見えた第一の原因は、いつも身なりをきちんとしていたことであろう。父はひどく身なりのやかましい人だった。母にたいしては「おひきずり」という言葉を以て、たえず身だしなみを、うるさく云った。母は沢山な子持ちになってからも、早朝に起きて台所へいくと、引窓の明りの下で、すぐに掌てのひらに水白粉を溶いて手早く顔になすっていた。そして水櫛で髪をなでつけ、それからお勝手にかかるのが長い間の、——年老とった後までの習慣だった。

だから、ぼくら子供らは、母の寝起き姿のままの汚い素顔や、だらしない恰好は、殆ど見ない程だった。今でも母の顔を思いにえがくと、どんな貧乏時代の母でも、母は薄化粧したきれいな人として胸に浮かんでくるのである。こんなのは、たいへんなお洒落しゃれともいえるわけだが、父にいわせれば、それが女のたしなみだったようである。といって、鏡台の前に長々と坐って、母が口紅をついたり髪をいじくっている姿も余り見たことはない。それなどを当時のことばで「おひきずり」と云ったのであろうと思う。

ぼくら男の子は、紺ガスリに黒の兵児帯へこおびと極っていた。紺ガスリ以外ほかの着物は着せられたことはない。学校通いには必ず小倉の袴をはき、袴のはき方は父からじかに教わった。どうかして、その袴の紐をぶらぶら垂らして歩いているのを見られると、すぐ母からも叱られた。当時、横浜には不良の愚連隊が横行して、おそろしく長い羽織の紐をつけ、その先

っぽをチョッキリ結びにして頸へ引っ懸けて歩くのが流行ったが、そんな真似などすればなお叱られた。ともかく服装は、いつもきちんとしていないといけなかった。その習性で、ぼくはつい近年まで、和服の帯でも洋服のバンドでも、腹のくびれるほど固く締めないと気がすまなかったが、この頃は逆にゆるやかでないと気もちが悪いようになった。幼少の習慣もひどいものだが、だんだん変わってくる自分の老懶ろうらんや横着さにも気づかれる。

良い子のぼくは、外でも喧嘩はしなかった。しかし父の留守を窺うかがって、家の内では何をやってた事やら分らない。みどり屋の売溜めから折々銀貨をクスネていたのは長いことであつたが、一度も叱られた覚えがないから、父も母もぼくの行為をつい知らず仕舞いでいたのであろうか。

いやたった一ぺん、店の隅でそれをやっていた所を、女中の貞というのに見つけられたことがある。貞は根岸の漁師の娘であつた。ぼくのすぐ下の弟は病氣して、しばらく漁師の家へ里子に預けられていた。夏など、ぼくもよく海水浴に行ったりした。そんな縁故から来ている娘だったので、どっちにも馴れ馴れしさがあつたにちがいない。貞は、ぼくがあの旧式な銭箱という物を横にして棧さんの隙間から銀貨を棒か何かで掻き出そうとしているキワどい所を見つけて「あらっ……」と、大きな眼をみはり「英さんたら、そんな悪い事をして。お母さんに云いつけますよ」と云った。「なにっ」ぼくはかえって貞へ食ッてかかった。「いいつけるなら、いいつけてみろ」そう云って、ひどいけんまくで、貞をなぐりそうにした。貞

は何か、捨てことばを投げて、奥へ逃げこんでしまった。

そんな事が根にあったせいだろうか、もとより子供の腕白にすぎないわだが、ぼくはこの貞をよくいじめた。女中いじめは母が最も注意していた所だが、一度などは、母も留守だったのであろうか、何か気に入くわない事から怒り出して、ぼくは貞を追ッかけてゆき、廊下の隅へ追いつめて、持っていた本で貞の頭や横顔を夢中で撲った。貞は、壁を背にしてぺたんと下へ坐ってしまい、両手で顔を掩おほっていつまでも凝じとうごかなかった。けれど、ぼくは貞が又、いつものソラ泣きしているものと思って、もう一ぺん力まかせに貞の髪の毛がこわれるほど本で打った。すると貞は途端に、きつと顔をふり上げて、ぼくの顔を睨にみつけた。齒から血が滲にじんでいた。いつものソラ泣きではなかった。と思っただけでも、ぼくは何か自分の手がしびれたような気がしていたのに、貞はいかにも口惜くやしげな眼をじつとすえて「覚えてらっしゃい。今に今に、……坊っちゃんだっていつまで、お家に居うちられやしませんからね。そして、よそへ出て行けば、誰かにきつとこんな目にあわされるんだから」と、泣きじゃくり、泣きじゃくり、又ぼくを睨にみ直して何度も云った。

このときほど、ぼくは自分の悪さを身に沁みて感じたことはない。恐いような気もちにさえ襲おそわれた。貞は、ちぢれ髪で額のまん中に、地藏黒子ぼくろがあった。それから幾年か後には、ぼくは貞が云った通りになった。行商箱を背負って、よその門口から門口を断られて歩いたり、ひとの切れ草履を拾って足にはきながら食を探す路傍の小犬になっていた。——何かつらい思いにくるまれて、ぼろぼろと、ひとりでに顔が下へ

向いてしまう時など、貞の顔が、往來の地面に見えてきた。そして、貞はもうお嫁に行つただらうかなどと思つたりして、もしどこかで、貞に会つたら、どうしようと、本氣になつて歩くにも心を勞つかつたり、心のなかで、謝つたりしたものだった。

前に、外では喧嘩をしたことがないと書いたが、外でも一度、やったことがある。

名は記憶にないが、相手はぼくらより一學級上で、英町はなぶちの焼芋屋の息子だった。二度も落第していたので、小ツブなぼくなどよりはるかに大きかった。これがぼくら群雀むらすずめの同級生には、驚みたいな脅威であつた。たびたび皆で齒はぎしりしていたが、どうにも強くて彼の影を見ると逃げ廻るだけだった。ところがある日、どういいういきさつがあつたのか、ぼくが帰る途中、彼の方から前に立つて、ぼくの行く途に立塞ふさがった。

ほかの連れは、彼を見るやいなやみな逃げてしまい、ぼくだけ一人逃げ損なつてしまった。もう逃げられないという気が、ぼくを盲目にしていた。ぼくは二三度、肩かどこかを小突かれたように思う。学校カバンを肩に掛けていたが、片手に草履袋という物を提ひげていた。校内で履く革草履で頑丈にびよう鉾こが打ち並べてあり、いわば上の無い靴みたいな物である。やにわに、ぼくは跳び上がって、その草履袋で相手の顔をいやというほど撲つたのだ。チビのぼくに相手は油断していたのだらう、わっと、恐ろしい声を発して、顔をおさえた。彼は近眼鏡をかけていたので、眼鏡のツルが片耳にぶら下がり、

そして、顔を掩った両手の脇にも血がながれていた。

ぼくは青くなって逃げ帰り、家の中に小さくなって竦んでいた。あんのじょう、やがて顔見知りの芋屋のおばさんが息子を引っばって来て、母へ何か怒鳴り出した。大きな図ウ体をしながら、息子の方はわんわん泣いている。まだ顔の血もよく拭き取っていない上に、元から近眼なので、ほんとに眼がつぶれたように見えた。芋屋のおばさんは「片輪になったらどうしてくれる」というようなことを母へしきりに猛っていた。何でも、この騒ぎに、すぐ斜向いの力ゴ虎の若い衆がやって来て、おばさんをなだめ、お手のものの人力車に二人を乗せ、母もついて、眼科へ連れて行ったらしい。話の結末は、どうだったか覚えていないが、とにかく、喧嘩はコリゴリしたのは忘れえない。

初めてやった腕力の争いが、これだったので、ぼくはそれから以後、喧嘩はした事がないのである。生来、短小な体だし、どんな相手にした所で敵わないことを自分で知っているからでもある。もっとも、ずっと後の壮年期になって、もう一つ例外な履歴の一つを持ってはいる。それは東京毎夕新聞の家庭部にいたときだった。急ぎの社用であり時刻だった。春日町の停留場で乗り替えようとしたところが、待てど待てどスズなりで乗りきれない。ついに辛抱しきれなくて、さいこの電車にぶら下がった。すると、声を囁かしていた車掌がもう電車が走り出しているのに、ぼくを覗いて降りろ降りろと頻りにいう。電車は疾走しているのだし、ほかの連中もぶら下がっていることなので、車掌の制止する職掌上の気もちも分るが、聞えない顔して横着をきめていた。すると車掌は、

ぼくが掴まっていた右手へ向って、自分の手を伸ばして来、そして、ぼくの指の一本一本を丹念にモギ離れた。堪ろうはずはなく、ぼくはちょうど富坂の登りへかかった辺で電車線路へころがり落ちた。

非はぼくにあって、先方にあるわけではない。けれど自分の醜態に自分でかつとなったものだろう。大勢の乗客の眼に嘲われた気もしたのである。起き上がるなりぼくは電車の影を目がけて追っ駈けていた。富坂のあの登りである。電車ものろいがぼくも息をきらした事だった。じつに冷や汗ものである。いま考えても、そのとき追いつけなくてよかったとつくづく思う。もし追いついていたら心にもない狂態をやっていたかもしれない心理だった。これ以外には、自分から手出した喧嘩をする気になったことはない。ただし、兄弟同士はまたべつだ。弟や妹には、正直、手を上げたこともある。けれどこれは喧嘩でなく、愛情の変形というものだった。そんなつきつめたばあい以外、兄弟喧嘩らしい兄弟喧嘩も、大人になってから以後は、ぼくらはやったことがない。

嗜好とか性癖などは、大人になってからよりも、案外、年少の日からもう持ち初めているものではないかと思う。

少年の日、ひそかに好きだった同窓の少女や近所の子や、また行きずりに見つとも好きなのと思う少女たちを回顧してみると、ふしぎにみなその型が一つである。それは皆、ほっそりしていて、色が浅黒く、髪の毛がちぢれている。

性情としては、ぼくは男らしい方でなく、父からも友達からもよく「泣き虫」といわれていた。自分では理由なく泣い

ているつもりはないが、すぐ臉を赤くするくせがあったのだろう。もっとも、古典などを読んでいても、書物をぐっしょりにするほど独りで泣いた覚えは数えきれないほどだった。芝居を見ても、頭が痛くなるほど泣くのであった。少年的感傷が人いちばい強かったものと思われる。それと又、ぼくは人知れない空想癖を持っていたようである。空想の中に自分をおいて、空想の中に自分を思うまま遊ばせてみるのが好きであった。だからぼくは少年の日から、少年がいやがる留守番というのは、好きであった。広い家のなかで一人か二人で留守番していると、ほしいままに空想し、その空想の中で飽かず遊んでいられるからであった。

どんな好きな少女にでも、自分から近づこうとしたことは一度もない。臆病であった。行き会えば、わざと素知らない顔をした。異常な胸さわぎと、行き交いの風の匂いを持って帰るだけだった。そしてその少女を空想の中に持ちこんで、自分の思う儘の、また描くままの境地において、共に愉しむことを頭のなかでしていた。長い夜途や、遠いお使いの途々には、いつも空想を道づれにして歩いた。

江戸文学の耽読や、家庭の眼を偷^{ぬす}んでは足しげくのぞいた伊勢佐木町の芝居小屋が、ぼくのそれをいやがうえに助成していたことはほぼ疑いない。その頃、伊勢佐木町的小屋は、羽衣座、賑座、喜楽座、雲井座などであった。壮士芝居というものも盛んであった。けれどぼくはやはり歌舞伎が好きであった。羽衣座と賑座とが、常時どっちも旧派の俳優の庵^{いおり}看板をかがけていた。羽衣座の舞台に年中出ていた中村玉之丞という俳優、おなじ一座の団童などという俳優が好きで、こ

の一座の演^だし物は殆ど観つくしていたといえるかも知れない。幸い、その頃、母方の佐倉のお祖父さんが十日半月おきに來てはのべつ滞在していたので、ぼくはおじいさんにかこつけては、日曜日など、お重箱をさげてはよく観劇に出かけたのである。ところが、おじいさんは羽衣座より賑座の方が好きで、そのためぼくもいつか賑座^{びいざ}の虜^いになつてしまった。

賑座という小屋は、その頃、ハンケチ芝居とよばれていた。横浜だけの流行語だが、ハンケチ女という称もよく使われていた。生糸^{きいと}や羽二重^{はふたえ}の輸出につれて、その頃、居留地の商館から外地向けの絹ハンケチが夥^{おびただ}しく売れていたのである。その絹ハンケチの縁^{ふち}かがりや刺繡風の加工をする小工場や下受けが、全市の裏町にどれほどあったかわからない。彼女らはつまりその従業者なのである。一種の織娘^{おりこ}みたいなものだ。だが彼女らは余得として得た絹ハンケチをあだかも誇りのように襟元へ三角形に垂らして首に巻いて歩くという一種の風俗を生んでいた。その紅や紫や青や桃色などの色とりどりを襟元にひらめかせつつ、町の夕風の中を群れて歩き、男の愚連隊などと、もつれ歩いていたりする風景も珍しくなかった。ハンケチ女というと、不良少女群のような響きをもっていたのである。

けれど彼女らは、浜の主体経済の中にいて、稼^{かせ}ぎを競っていた者たちだから、金づかいも荒かった。賑座には、紅黄白紫のハンケチがいつも平土間^{ひらどま}を埋めてい、鼯^き役者に奇声のこもった声援を送っていたものである。中には、なにがしという俳優は、ハンケチ女の専売であるなどと蔭口も平気で客

にいわれていた。そういう雰囲氣の小屋なので、ぼくら子供心にも、何となく、ここへ足が向け難かったのであるが、佐倉のおじいさんには、又なく愉しい風景らしく、杯を手に、わけもなく眼をほそめて観劇三昧さんまいに一日を過すのだった。

いや一日ではない。その頃の横浜芝居は、一昼夜といつてよかった。朝は午前八時か遅くても九時には開幕する。晩のハネは午後十一時頃になる。その間ぶつ通しだから、三番叟ばそうから観る客は、朝、昼、晩と三度の食事を芝居の中で食べる人もあった。演し物は一番目といい二番目物といい、すべて通し狂言である。天下茶屋でも、妹背山いもせやまでも、日蓮記でも、菅原伝授手習鑑でも、すべて序から大尾たいびまで、つまり竹田出雲や近松浄瑠璃集にある通りを院本まるほんどおりそっくり上演するのであった。見であつたことはいうまでもないが、演劇の骨格とか、浄瑠璃や小説の構成というものを知るうえで、ぼくにとつては、あれが知らず知らず、後の何かの基盤に役だつていたように思われる。

その賑座で大きな人気があり、あくどいがまた一種独自の芸風のあつた市川紅車、荒次郎、市孝、英升などという達者な俳優たちの描いて観せてくれた数々の幻影は、今でもぼくの脳裡にはあざやかである。そしてそれから数十年の後、これらの老優たちの名が、たしか昭和十七、八年頃かと思うが、本所の寿座ことぶきに演かつていたようであつた。何かでそれを知つて、なつかしく思つた事であつた。——で、ぜひ一度観に行こうと思つていたが、そのうちにあの戦下の焦土となつてしまった。

或る日の酒父像

あんにやもんにや、などという言葉は下町でも今は余り使われていないのはあるまいか。ぼくら子供時分にはややもすると「——この子は、ほんとにまだ、あんにやもんにやで」とか、「どうして、そういつまで、あんにやもんにやなの」などとのべつ云われたものだった。

十四、五歳ともなれば、現代の子は、いわゆる十代の季節をはつきり持ち、異例だろうが三面記事にも時々登場して、単独の自殺もする。心中もやる。そんな子でなくても、両親へは批判の眼をもつ。大人達へのたいがいな嗅覚は備えてしまふ。決して「あんにやもんにや」なんていえる眸の群れではない。

けれど、ぼくら明治の子には、それはいかにもふさわしい言葉であつたらしい。ぼくらは間違ひなくその分らず屋以上の、あんにやもんにや達であつた。——自分のばあいで云えば、現に家庭の内面では、ぼくの十三から十四の間に、没落へ入る傾斜を急にしていたはずだし、いよいよ大酒になるばかりだった父の酒狂ぶりにも、母の悩みにも、義兄の一身上や何かにつけてのごたごたにも、「これは、ただ事でない」ぐらいな感じは子供心にも分つて来そうなものだったのに、ぼくは一こう気づいてもいなかった。

やがて、家の没落が、父自身の口からあきらかにされ、同

時に、学校は中退しろ、他家へ奉公に出ろ、と突然云い渡されたのだが、その日その時まで、全然、何も知ってはいなかった。自分らの嘻々^{きき}と暮^くしていた家庭がそんな脆^{もろ}いものとは、夢にも思えなかったのである——だから、その間の記憶はみな後日になって独り思い当ってきたり、母の過ぎた愚痴や周囲の変化から自然あとで察しられたことではない。甚だ曖昧な云い方だが、事実何とも、あんにやもん^{あんにやもん}にやの年代だったのだから仕方がない。——それがぼくの幾ツぐらいかといえ、それもはっきりいえないが、何しろぼくが十四歳になる前の一年半か一年そこそこの間に、らちやくちやなく、一家破滅となったのは確かであった。同時に、今となって思えばそれがぼくの尊い、あんにやもん^{あんにやもん}にや時代の終^{しゅう}熄^{せき}でもあったのである。

何か、家の中が近ごろ変だと子供心にも感じ出した事のうちでも、いちばん変に思ったのは、真夜中に二階の道具類を、見知らぬ他人が何人も来て、まるで芝居で見た石川五右衛門の手下達のように、梯子段から裏口へ担ぎ出して行く光景だった。

当然、その物音には、ぼくら子供も、密^{ひそ}かに眼をさました。そして深夜の奇異な大人たちの行動や灯影のうごきに、固唾^{かたず}をのみ、凝と、蒲団の中から薄目をあいて見ていたものだった。

——が、見ていただけで、それが家庭の何の兆候かすら、ぼくには判断できなかった。おなじ事は、幾たびもあった。そして、深夜の訪客のある晩にかぎって、ぼくらの寢床は階

下の部屋に置き更えられ、母も父も「早くおやすみ」と、ぼくらを片づけるように寢床へ追いたてた。

その頃から家運も父の会社の方も、没落への地スベリを急調にしていたのであろう。会社不況の原因は何といっても日露戦争の勃発であった。その宣戦布告は、ぼくが十三歳の明治三十七年二月十日のことであった。もちろん、海上不安や経済混乱などの現象は、それ以前からで、居留地一帯の商館にも閉鎖するものがふえた。わけて外国船相手の横浜棧橋会社は、かんじんな棧橋に繋留船の急減をきたし、ひどい苦境に落ちてきたのである。

その上に、父と社長名義人の高瀬理三郎氏との間に、感情的な訴訟沙汰をひきおこし、地方裁判所では父の云い分が通ったが、控訴院では敗訴になり、さらに大審院にまで持ってゆくという意地と金づくみみたいな長期の係争を内輪で続けたのだった。

元々、父と高瀬氏とは、共に横浜の開港的な企業の中^なでむすびあい、年輩も地位も、高瀬氏の方がはるかに父より先輩ではあったが、いわば刎頸^{ふんけい}の仲^なといつてよい間柄であった。

それが一朝にして、ばかな訴訟をやり出した遠因は、もちろん会社の不況にあったろうが、高瀬氏に与^{くみ}する人々と、父をけしかける一部と、当人以外の応援や弁護人側の対立にもなって、退くに退けないかたちを拵^{こしら}えてしまったものらしい。もっとも、父の放漫なやり口や花柳界における遊び方は、いくら外人相手の商策上の必要もあったといえ、ひとの目に余るものがあつたにちがいない。それにまた父の腹には「創業

からきょうまで、この会社をこれまでにしたのは自分だ」という覇気もあり、大部分の出資をもつ高瀬氏をつい無きかの如く振舞ってきたのでもあるまいか。

とにかく高瀬氏の不満と不信をうくることになって、經理面の疑義や数字の指摘となり、それが両者の衝突となったのだった。しかし、その程度の揉め事なら、何も会社をつぶしてまで、両者が法廷で争うほどの事もなかったろうに、当初、冷静な高瀬氏と、覇氣のつよいぼくの父とが、その問題で口論となったさい、突然、父がテール越しに拳固で高瀬氏を撲りつけたという一事件があったのである。

高瀬氏は横浜一流の紳商であり、海運業界でも人格者といわれていた。その高瀬氏が怒ったのだ。そして「吉川を横浜におかない」と云い、「徹底的に屠^{ほぶ}る」とも云ったそうである。横浜貿易新報や、毎朝新聞などにも出て、父の野蛮な一拳は、しばらく人の話題になったものらしい。

もし、父を知る者はその子だ——ということをゆるして貰えるならば、ぼくの父はいかにもそんな事をやりかねない人であった。理性もないではないが、何かに激すと、理性より先に発するものに、理性が間にあわなくなるのである。

それでも、後から理性を取戻して、詫^わびるとか、人に円満な解決を頼むとか、弥縫^{びほう}の方法を持ちうる人もあるが、父のは、やってしまうと、自身では内心悔いていても、さらにその非理性を正当化しようとして突ツ張り抜く二重の頑固さがあつた。——高瀬氏のばあいなどもそれで、新聞記事を見て驚いた母は、さっそく翌朝、カゴ虎の俵をとばして、高瀬氏

の仲通りの本邸にゆき、父に代ってさんざん詫びて帰ったのであつたが、数日後、それが父に分ると、父は「貴さまからして、おれを高瀬に謝らせる氣か。出しゃ張りをするな」と、母をも撲りそうにしたということである。

ところが、父のこんな性情は、当時のまだ開港場氣質^{かたぎ}を多分にもつていた海岸通りや仲通りの業界仲間では反対に「おもしろい人物だ」とか「豪快な人だ」とか、変に父を持ち上げる人々も少なくなかつたらしく、父の鉄拳事件にしても、また訴訟にまで発展しても、そういう人々はさかんに父の尻押しもしたのであつた。といって純粹に父を思ってくれる理解者や同情者だつたわけではなく、高瀬氏に対する海運業者の反感やら、棧橋会社の乗っ取りを策すといった類の人々もあつたのだが、そういう機微な人ごころなどを洞察できる父ではなかつた。まともに訴訟へ取っ組んで、さしてありもしない私財を長い間つぎこんで、身も心も疲らしていたのであつた。

家の一隅を暖簾にしていた「みどり屋雜貨店」も、その頃は、いつのまにか、店仕舞いしてしまつていた。どんなふうに関店したのか、よく思い出せないが、開店のさい大売出しの手伝いに来た同じ問屋の松屋から、番頭小僧が大勢で残品引取りの荷車を曳いてきたことは覚えてゐる。けれど、それから、カン詰類だの香水だの、いろんな雜貨の売れ残りが、家庭の隅々に、ころがつてい、家へ来る人へやつたり、ぼくらが外へ持ち出したり、まるで邪魔物みたいにされていた。また義兄は、以後もずっと左右田銀行へ通勤をつづけてい

たが、時々、小田原の養家先へ帰ることが多かった。ある時は何か沈痛な調子で父から、「政広、頼むよ」と云われて出て行ったこともある。父の頼みは、金策であつたのだ。しかし、養家先の資産や山林は、義兄の意のままにはならないので、この方の金策はついにさいごまでどうにもならず仕舞いであつた。――そればかりでなく、窮地に立つた義兄はやがて出奔して、以後三十年余も、姿をかくしてしまつたのであるが、その義兄の出奔は、もすこし後の事であつた。

とにかく、ぼくらの家庭は、道具の売り喰いという定^{じようせき}石^{いし}どおりな所まで来ていたのである。それが二た月に一度か三月目ぐらいの深夜の物音となるのだつた。

道具屋もどこかよほど遠方から呼んで来たものにちがいない。見栄坊な父は、近所の人目は元より家族らにも、母以外には、知られたくなかつたのだらう。で、昼間はいけない、真^ま夜^よ半^なにという考えだつたものとみえる。

道具の売り方も、父のは一風変つていた。まず二階の一部屋から売り初めたのであるが、「――この一部屋でいくら？」と値をつけさせたものだという。つまり一部屋ずつ売りに出したのである。それが、極秘にだから、道具屋の主人、内儀さん、若い衆などが、大八車に提灯をつけて、世間の寝しずまつた頃、裏口からおとずれると、女中も起さず、母と父が迎えに出、やがて二階から西洋タンスやら絨緞やら額やらテーブルなどを担ぎ下ろしてくると、下に佇^{たまたす}んでいる父が「静かに、静かに」と、世間へ気がねそうに頼んでいた。そういう世間であり、人への体裁を必要とした当時の世風であつた

ことを、一応考慮に容れて貰わないことには、父の「静かに、静かに」と道具屋を拜むように云っている心理は、今日では、何とも、通用しない話であらう。

このときの道具屋には、余談がある。

それからずっと後になって、ぼくの家も、見るかげもない、どん底へ落ちてから、どう知つたのか、その道具屋の主人が、ある日、手土産を持って「おかげさまで、あの折は、たいへん儲けさしていただいて、それから店も順調に行つておりますので」と、お礼に來たそうである。

それほど、道具屋に感銘されたわけだから、当時でも世間の経済觀念が、みな父みたいだつたわけでは決してない。セチ辛^{がら}かつた事や、家庭消費の面の地味だつたことは、到底、今日この頃のような、ふんだんなものではなかつた。

たとえば、ぼくらのそんな家庭でも、頭数六、七人もの子供の朝食の膳に、よく生卵を割つたものだが、大きな井^{どんぶり}に、きまつて卵は三個しか女中が割らない。それへ醤油はたくさん目に注いで搔廻し、七つの御飯茶碗へ等分に分ける。だから「そつちへ黄味ばかり入つた」とか「こつちが少ない」とか、よく食膳のいざこざになった。どうかして、卵を一人でまるごと一ツ御飯へかけて食べてみたいとは、ぼくらの念願だつたものである。

繊維類にしても、絹とか羽二重とかいえば、高貴な感じさえしたものだつた。ちりめん、めいせんといえば、よそ行きを意味する。どこの家でも、女は夜なべに、子供の足袋の穴や洗ひ張り物を、眼をいたくして針の先でかがつていた。燃

料やランプの油はいうまでもないし、ちよつと建てこんでいる住宅地の横へ入れば、その勝手口や縁先などの日向に、お飯櫃や釜底の御飯つぶを流し元で掬った物が、ていねいに目ザルに並べられ、白い干飯として干し上げて保存してゆく習慣のあることが軒毎によく見られた。それが大きな紙袋に蓄まると、賽の目に切った寒餅や黒豆など加えて、母が砂糖煎りにしてくれたのを、ぼくらはあられと呼んで、冬の菓子によくこび合つたことだつた。

内輪ではそういう旧藩士の暮しのしきたりみたいな風習を、ちんまり崩さずにもっている古風の面もありながら、世間へは貧乏をひどく恥としていた。政治、社会制度、といった方へ貧困のもとを糺す風潮はなかつたといつていい。「貧乏はその者の心がら」と、ひと口にすぐ片づけられてしまふ。貧乏人は即、人間的劣等かのような差別視がつよかつた。だから、落ちぶれる——をひどく恐れた。落ち目をつくろい、見得を張ることになる。

ぼくの両親などは、典型的なその方に見得張りであつたのか、剛愎らしい父も、道具屋にはそんな大真面目で小心を見せていたし、母もまた母であつた。たいしたお嬢さん育ちでもなし、世間知らずといつても、深窓の人でもないくせに、家が零落し初めてからも、今日では、理解のつかないような事をやっていた。

いよいよ家計も切りつめなければ、そして、踊のお師匠さんも断り、女中もみな帰して、これからは勝手元も自分一人でやってゆく、と遅まきながら母も考えてきたらしい。それ

は母にしては大へんな奮発だつた。ところが、母はまもなく近所の人から、物珍しげな笑ひ者にされていた。というのは、母が外へ出る姿を見ると、長年の習慣から、斜向いのカゴ虎の若い衆が、黙っていても、すぐ足許へ、人力車の梶棒をもつて来て下ろすのだった。それが母には、どうしても断れないで、じつは初音町付近まで、ネギや片肉の買出しに行くのでも、ついそれに乗つてしまふのである。だから、女中を廃したくせに、八百屋や乾物屋の買物にも、人力車に乗つてゆくといい、界隈の人目が蔭で笑つていたのもむりはない。

また、そのカゴ虎の溜りでは、母のこんな事もよく噂ばなしになつた。ある朝のこと、家のすぐ前のきれいな溝川へ、母が髪のかんざしを落したのである。その頃流行つた珊瑚の五分珠に金脚とかいう物だつたらう。小橋の上から覗いてみると、それは久保山から流れてくる早い水勢で、ちよつと深い。かんざしは、底の方にキラキラ透いて見えている。すると毎朝掃きついでに、ぼくの家の前まで掃いてくれるカゴ虎の若い者が、竹箒を抛つて、駈けて来た。そしてすぐ腰まで入つて、造作もなくかんざしを拾いあげてくれた。ところが母は「ありがとうよ」と、お礼をいいながら、「それは、あんたへお駄賃に上げる」と、かんざしは、その者に与えてしまつたのである。——まだ家財の売り食いまではやっていない日の事だつたのだらうが、そんな妙な気前のある母だつたので、落ち目は人いちばい辛かつたのではあるまいか。けれど仕舞いには、見得も持つていられなくなり、カゴ虎の俵で、質屋通いもし初めた。その質屋へ、ぼくは一ど母に伴れられて行ったことがある。座敷へ通され、茶菓が出て、

もてなされたので、ぼくは質屋というような通有的な感じはちっとも覚えないうでいた。

すると、質屋の土蔵から幾個かのつづらが母の前に持ち出された。つづらにはよく朱漆で家の定紋が描かれてあったものである。丸に鷹の羽の紋だったから、子供心にも「おや、これは家のつづらだ」と怪しんで見ていた。質屋の主人番頭と、もひとりの商人らしい男が、長い時間をかけて、五個か六個かのつづらの中の衣服を全部開けて、綿密にしらべ出した。ぼくの眼にも覚えのある女の子たちの友禅物や母のよそゆきやら父の紋付袴やらが、何しろ座敷いっぱいになった。そして、ほとんど日も暮れ方になって「——奥さま、これはどうも、御相談どおりにゆきません」と、古着屋らしい商人の方が、母に何か説きつけていた。そのときの母のかなしげな顔と、悔いの色は、わけもなくぼくの胸までしめつけていた。

母はその帰り途に「だまされた……」と暗い顔に、涙さえ溢かべていた。そして、ぼくへ「お父さんには黙っておいで、叱られるからね」と何度も云った。その日の事は、よく理解できなかったが、あとで母から聞かされた事に依ると、母が金繰りに困っているのを知って、例の知人の富樫夫人が、ごく親しいという古着屋を紹介してよこし、その古着屋が「月々、質の利息を払っていらっしゃるよりも、いっそお手放しになれば、まとまったお金になりますから」と、すすめる儘、その言葉に乗って、質物の総下見をしたのだった。けれど値踏みの結果は、とても質値以上には引取れないと云われ、あげくに質利子は、払わねばならないとあって、みすみす幾つ

づらの入質物を、全部ただ流しに取られてしまったということであった。

没落までの、こんな経過を書いていれば、それは、やくたでもない事ばかりだし、限りもないので、もうやめる。そして、これだけはぼく自身、忘れないといっている、わが家のさいごの日を書いてしまいたい。さいごの日というと、何だかすこし大げさだが、つまりぼくが、あんにやもんにや時代の愉しい五、六年を過ぎた赤門前の清水町の家と、それから高等四年までを学んだ南太田小学校を去って、もう二度と、そこでの日も、ぼくの少年期も、終りを告げる日となったときの記憶である。

十四歳のときの、二月頃だった。

春には、小学校から中学へ入れるつもりだった。学校の成績は、中くらいで、平凡な一生徒だったが、中学に入れる自信ぐらいはもちろんもっていた。ちょうど久保山の神奈川県立中学の新しい校舎が新築されていて、その輝く大校舎を望むごとに「卒業したら、あそこへ通学するのだ」と、胸をふくらませていたものだった。

ところが、二月の或るお昼休みの時間。——その頃、小学校では、家の近い生徒は弁当を持たずにゆき、お昼休み時間に各家庭へ喰べに帰ることもゆるされていたのである。

ぼくもよく昼休みには家に帰った。その日も、お茶漬が何か掻っこんでいた。すると、いつも、表から帰るはずの父が、裏木戸から戻って来た。

見ると、父は、どろんこといっていいほど泥酔していた。

フロックコートを着ていた。その洋服も靴も帽子も、地面で寝て来たかと思われるほど汚れている。何か、ぎよつと人に映るような顔色と眼であった。どすると、大きな物音をさせて、勝手元の何かにつまずいて、ぶつ^{たお}仆れたのを、母が扶^{たす}け起して、家の中へひきずり上げるように抱えこんだ。

ぼくにも、ただならない父の容子が分ったのであろう、あわてて膳のそばを離れ、学校履きの草履袋を手にもつや否や、表からコンコン出て行ってしまうとした。すると、その背中から「英^{ひで}つ」と、父の呼ぶ声がした。小さくなって、父の前へ戻った。父は坐り直していた。父の顔や手にスリ傷があった。母にはもう何もかも分っていたのだろうか、そばで泣いていた。母の泣く姿も、今ではすでに母の仕癖^{しくせ}のように、右の袖口を、左の指先につつま、掩^{おほ}っているのである。

幾日も、酒へ酒をあびていたような匂いが父のからだから発散する。「——おまえはな」と、父は云った。息切れが聞えるのである。「……英。おまえはな、長男だ。お父さんは、訴訟に負けたよ。もう、おまえばかりでなく、こんな大きな家にはいられない。おまえは長男だから一番先に働きにゆけ。いいか」と、何度にも、息をやすめては云った。

ぼくは「はい」と、答えた。と答えるしかないし、まだよく父のいう意味が分らなかつたのでもある。だから、父のこゝろが終ると、また草履袋を持って、すぐ学校へ行こうとした。

すると父は、立ちかけるぼくを見て「まだ分らないのか」と、こんどは、いつも悪酒になると出る大声でどなった。そして「もう、学校へ行かなくともいい。学校を退いて、おま

えから先に働きに出るんだ。わかるだろう、お父さんの云っていることは」と、云い放して、梯子段を這うように、二階へ上がってしまった。

それから、たった三日目か四日目に、ぼくはよそへ奉公に出ることになった。奉公先はオテイちゃんのお母さんの近藤夫人が紹介してくれた家で、近藤さんの親戚にあたる住吉町の川村印房という印章店であつた。「御主人は、とても優しい人だし、おかみさんは私の従姉妹^{いと}にあたる人だから、ちつとも、つらい事なんかありやしないからね」と、その日、ぼくを連れに來た近藤夫人は、なぐさめてくれたが、親しい家というだけになお、ぼくはよけい嫌でならなかつた。もつと誰も知らない家へ行つて、誰の眼にもふれない所で働くなら働きたかつた。

いやそれよりも、もつと嫌だつたのは、丁稚^{でっぢ}さんの着る縞の着物に角帯を締めさせられた事だつた。幼少から着なれていた紺ガスリとの訣別ほど悲しかつた覚えはない。近藤のおばさんと母のあいだに挟まって、嫌々紺ガスを脱がせられたのを、近藤夫人がけけらけら笑つて「よく似合うわよ、英さん」なんて言つたとき、ぼくは、ぼくの父がやるような癩癧^{れびん}を何かに爆発させたくなつた。そして、角帯を締めて貰うやいなや、便所の隅へいつて、おいおいと声をあげて泣いた。こめかみが痛くなるまで泣きじゃくつてしまった。そして、いつかぼくが、女中の貞を、その薄暗い壁の隅ッこへ押しつけて、本でぴしゃぴしゃと撲つたことが慟哭^{どうこく}の中で思い出されていた。